仙台市文化財調査報告書第228集

仙台平野の遺跡群XVII

——平成9年度発掘調査報告書——
燕沢遺跡第11次調査

1998年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第228集

仙台平野の遺跡群XVII

――平成9年度発掘調査報告書――
燕沢遺跡第11次調査

1998年3月

仙台市教育委員会

序　　文

国庫補助事業として「仙台平野の遺跡群」発掘調査に着手したのは昭和56年度でした。この事業も数えて17年目を迎え、これまで陸奥国分寺跡、国分尼寺跡の国指定史跡の範囲確認調査や郡山遺跡、富沢遺跡などの個人住宅建築に伴う小規模調査を行ってまいりました。今年度は、燕沢遺跡の範囲の確認調査ならびに性格究明のための発掘調査を実施しました。

当市は平成元年4月に政令指定都市となり、都市整備の充実が急務となってきております。こうした中で、道路整備に関わる総合交通体系の整備事業や区画整理事業を基盤とした町づくりが進められています。一方、民間の小規模開発も増加し、発掘調査件数も漸次増加する傾向にあります。

当市教育委員会では、先人の創造した歴史と文化遺産を次の世代に継承し、生活の中での活用を図っていかなければならない責務を負っています。しかし、こうした文化財の保護活用は、市民の方々の御支援があってこそ、はじめて成果をあげられるものと思います。

今後とも広い視野にたって充実した遺跡保護を行っていくために、精一杯努力してまいる所存でありますので、さらなる御指導、御支援を切にお願い申し上げ、刊行のご挨拶と致します。

平成10年3月

仙台市教育委員会

教育長　堀　籠　克　彦

例　　言

1．本書は平成９年度国庫補助事業である緊急遺跡範囲確認事業に伴う「仙台平野の遺跡群」の発掘調査報告書である。

2．本書の土色については「新版標準土色帖」（小山・竹原：1997）を使用した。

3．実測図中の水糸高は標高である。

4．実測図、本文中の方位は真北を基準としてある。仙台においては、磁北は真北に対して西偏約7°20′である。

5．本文執筆は、長島榮一　Ⅰ、豊村幸宏　Ⅱ[１]１、２、３が行い、編集は長島・豊村がこれにあたった。

6．遺構略号は次の通りとした。

ＳＡ	柱列	ＳＢ	建物跡	ＳＤ	溝跡・溝状遺構
ＳＩ	住居跡・竪穴遺構	ＳＫ	土坑	ＳＸ	性格不明遺構

7．本書中に掲載した発掘調査で出土した遺物及び遺構・遺物の実測図は、全て仙台市教育委員会が保管している。

8．今年度事業は平成９年９月に着手し、平成10年３月に終了した。

目　　次

序文
例言

Ⅰ　調査計画と実績……1
Ⅱ　発掘調査報告

［1］燕沢遺跡－第11次調査－
1．調査経過……2
2．発見遺構と出土遺物……3
3．まとめ……19
写真図版……25

Ⅰ　調査計画と実績

仙台市は昭和62年に宮城町、昭和63年に泉市、秋保町と合併し、明治22年の市制施行以来100周年にあたる平成元年に、全国11番目の政令指定都市に移行した。さらに市営地下鉄の開業や延長、仙台空港の国際化、高速道路網の充実によって著しい都市化が進む状況になってきている。旧仙台市域では辛うじて残っていた農地も急速に宅地になり、緑ゆたかであった郊外の丘陵地も開発の予定が表明される時世となっている。

仙台市内の遺跡－埋蔵文化財包蔵他－は約700箇所に達するが、日々変化する社会の中で現状のまま将来に残し、伝えていくのはきわめて困難である。このような中で開発に対応した発掘調査だけではなく、事前に遺跡の範囲と性格究明を目的とした発掘調査を実施して行くことが、今後の遺跡保護に重要と考えられる。また遺跡内での個人住宅や木造の共同住宅建築のような小規模開発に伴う発掘調査も必要に応じ実施していくことが、遺跡の範囲確認や遺構の在り方を検討するうえでも有用と考えられる。それらを目的として当市教育委員会では昭和56年度より国の補助を受け、「仙台平野の遺跡群」の発掘調査を実施してきた。これまで郡山遺跡をはじめ、陸奥国分寺跡、陸奥国分尼寺跡、仙台城巽門跡、大年寺惣門、長町駅東遺跡（長町貨物ヤード跡地）で発掘調査を実施し、大きな成果をあげている。

今年度は燕沢遺跡で発掘調査を実施した。燕沢遺跡は平成５年度から継続的に調査し、今年度で５年次目になる。昨年の第10次調査では平安時代の寺院の区画と考えられる塀跡を発見した。今年度はその北東に隣接した地区で、塀跡の延長部を発見する目的で調査を実施した。

１．目　　的　仙台平野に分布する遺跡群の範囲、性格究明のための発掘調査

２．調査面積　400㎡

３．調査期間　平成９年10月～12月

４．調査体制

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　仙台市教育委員会文化財課

課長　佐藤　憲一

調査第一係　係長　田中　則和　　主査　木村　浩二　　主事　長島　榮一

文化財教諭　豊村　幸宏　　嘱託　森　　剛男

調査第二係　係長　結城　慎一　　主査　篠原　信彦

管理係　　係長　今井　京子　　主事　高橋　博史　　主事　佐藤　直美

調査地	所在地	申　請　者	調査事由	対象面積	調査面積	調　査　期　間
燕沢遺跡	宮城野区燕沢東三丁目185他	仙台市教育委員会 教育長　堀籠克彦	範囲確認	400㎡	400㎡	平成９年10月13日 ～12月12日

調査実績表

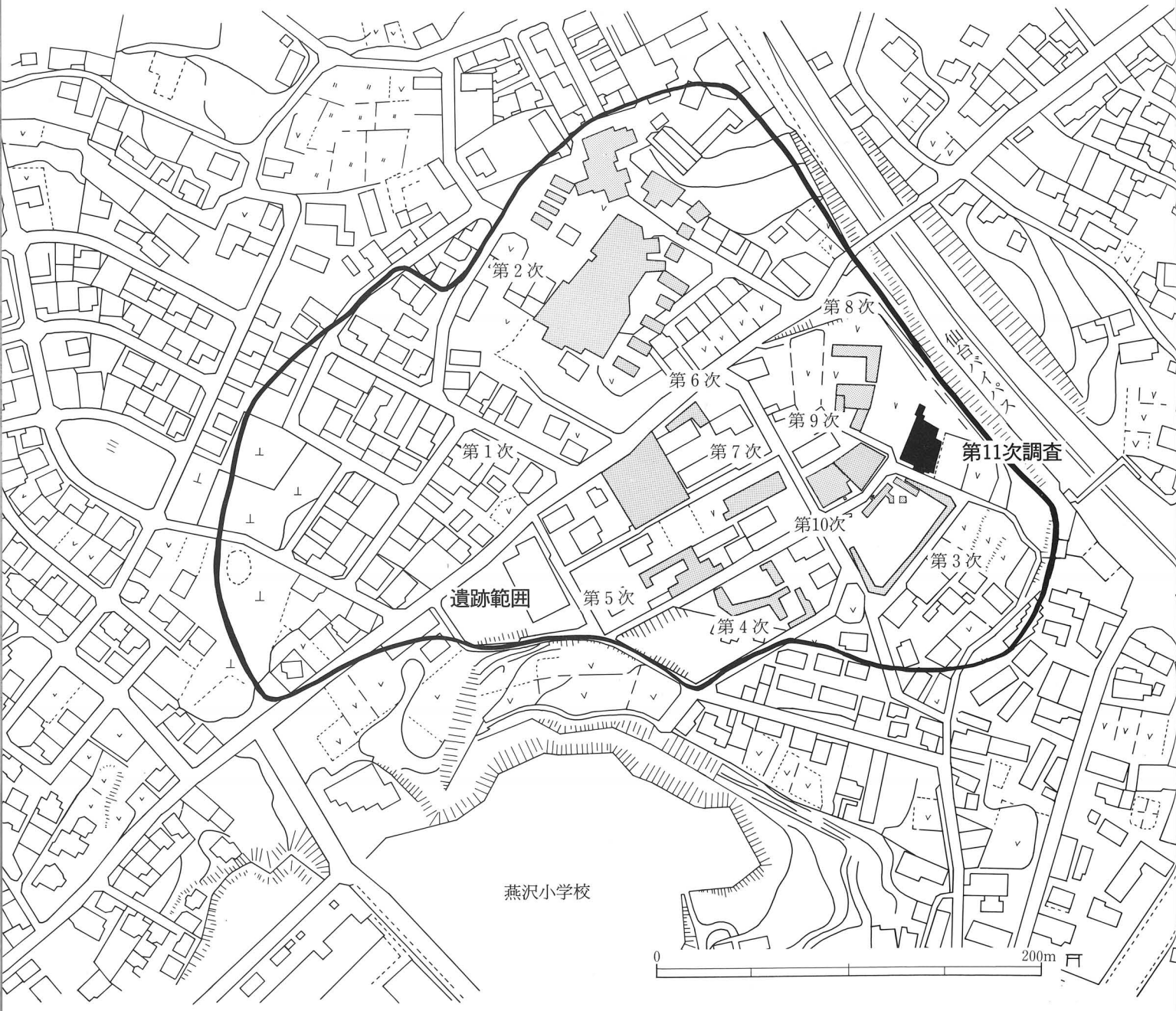
II　発掘調査報告

［1］燕沢遺跡－第11次調査－

1．調査経過

平成５年度の第７次調査より、遺跡内の最も標高の高い平坦地で発掘調査を実施している。今年度は、昨年度の第10次調査のII A 区と道路を隔てた東側に調査区を設定して発掘調査を実施した。今回の調査区は平成７年度の第９次調査で検出したSB ３掘立柱建物跡の東側に寺院の中枢部を区画する遺構が存在するかどうかを明らかにする目的で設定した。

発掘調査は10月13日から実施したが、以前に調査区を含む周辺地域一帯が削平された可能性があり、遺構の遺存状況はよくなかった。遺構の概要が明らかとなった11月20日に周辺の住民を対象にした説明会を実施し、野外における発掘調査を終え器材等の撤収が完了したのは12月12日であった。



第１図　調査区位置図

2．発見遺構と出土遺物

第11次調査で発見された遺構は、柱列２列、溝跡２条、竪穴住居跡２軒、土坑７基、性格不明遺構２基、小柱穴、ピットなどである。これらの遺構は、畑の耕作土（基本層位第Ⅰａ～Ⅰｃ層）の直下の第Ⅱ層で検出されている。遺構番号と遺物番号については第７次調査からの継続番号であり、第１次調査から第６次調査までとは区別している。

SA10 柱列　調査区の西南部で東西方向に並ぶ２基の柱穴を検出した。柱痕跡は確認できなかったが、掘り方の形状や規模がほぼ同じであることから２基の柱穴よりなる柱列と推定した。検出した長さは掘り方の中心で約160cmほどで、ほぼ真東西方向である。柱穴の掘り方は一辺42～56cm×57～64cmの不整な方形で、柱穴の深さは遺構検出面より８～19cmである。掘り方の埋め土は、黒褐色シルトである。

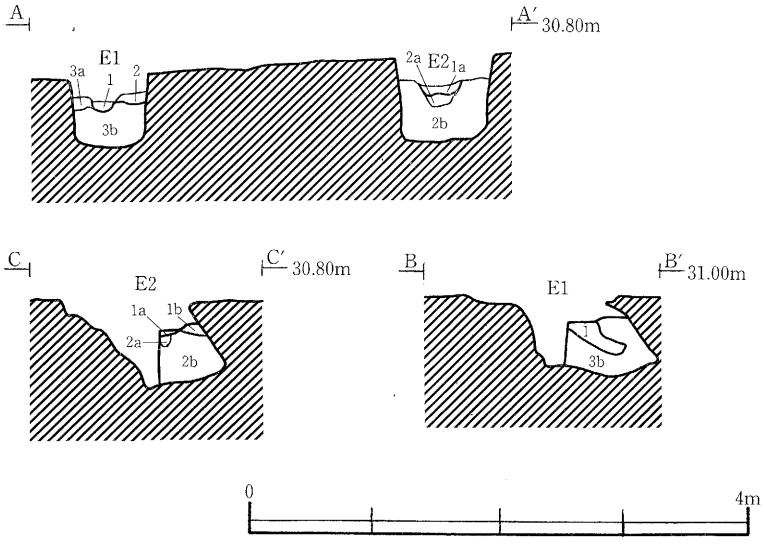
SD35 溝跡に切られている。

［出土遺物］　Ｅ１柱穴掘り方埋め土より土師器坏片、赤焼き土器坏片が少量出土した。

SA11 柱列　調査区の西壁中央部で検出した東西方向に延びる柱列である。調査区内で２基の柱穴を確認したのみであるが、さらに西側に延びていく可能性もある。柱間寸法は273cm、方向はＥ－2°－Ｓである。柱穴の掘り方が一辺60～73cm×92～108cmの隅丸長方形で、中段ではそれぞれ60cm×60cmの隅丸方形となる。又、柱穴南壁は両柱穴ともえぐられるように横方向に掘り込まれている。柱痕跡は25～33cmの円形もしくは楕円形である。柱穴の深さは、遺構検出面より54～67cmである。掘り方の埋め土は、黒褐色粘土及びシルト質粘土、灰黄褐色シルト質粘土、暗褐色粘土質シルトである。

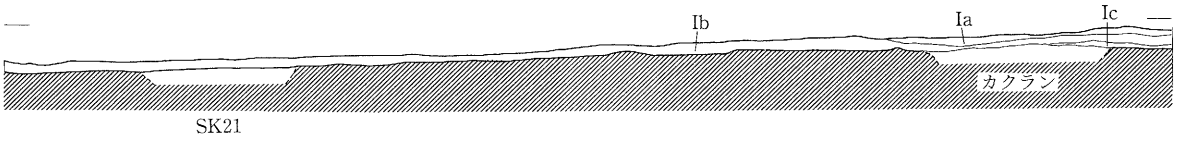
［出土遺物］　Ｅ２柱穴掘り方埋め土より土師器甕片、赤焼き土器坏片が１点ずつ出土した。

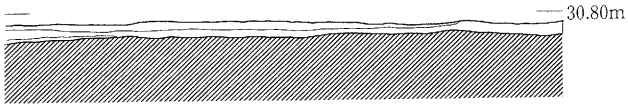
SI10 竪穴住居跡　調査区の東南部で検出し、遺構の南半部は調査区外へ延びている。削平のため周溝の一部と柱穴４基のみを検出した。平面形は方形で北辺6.2m 以上、西辺4.3m 以上である。方向は、西辺でＮ－6°－Ｗである。周溝は北辺部と西辺部を検出し、上幅15～25cm、下幅10～15cm、深さ５～12cmである。周溝内の堆積土は黒褐色シルトである。柱穴の掘り方は、一辺が40～66cm×40～55cmの隅丸方形で、柱痕跡は19～27cmの円形もしくは楕円形である。柱穴の深さは遺構検出面より19～42cmである。柱間寸法は4.2～4.3m である。掘り方の埋め土は、黒褐色シルト、暗褐色シルトである。

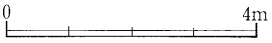


遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
Ｅ１	1	10YR3/3 暗褐色	粘　土	
	2	10YR5/2 灰黄褐色	粘　土	礫を含む
	3a	10YR2/2 黒褐色	粘　土	小礫を含む
	3b	10YR2/2 黒褐色	粘　土	礫を含む
Ｅ２	1a	10YR3/4 暗褐色	粘　土	小礫と炭化物を少量含む
	1b	7.5Y2/3 極暗褐色	粘　土	
	2a	10YR3/2 黒褐色	粘　土	小礫を含む
	2b	10YR3/2 黒褐色	粘　土	中礫を含む

第２図　SA11 柱列断面図



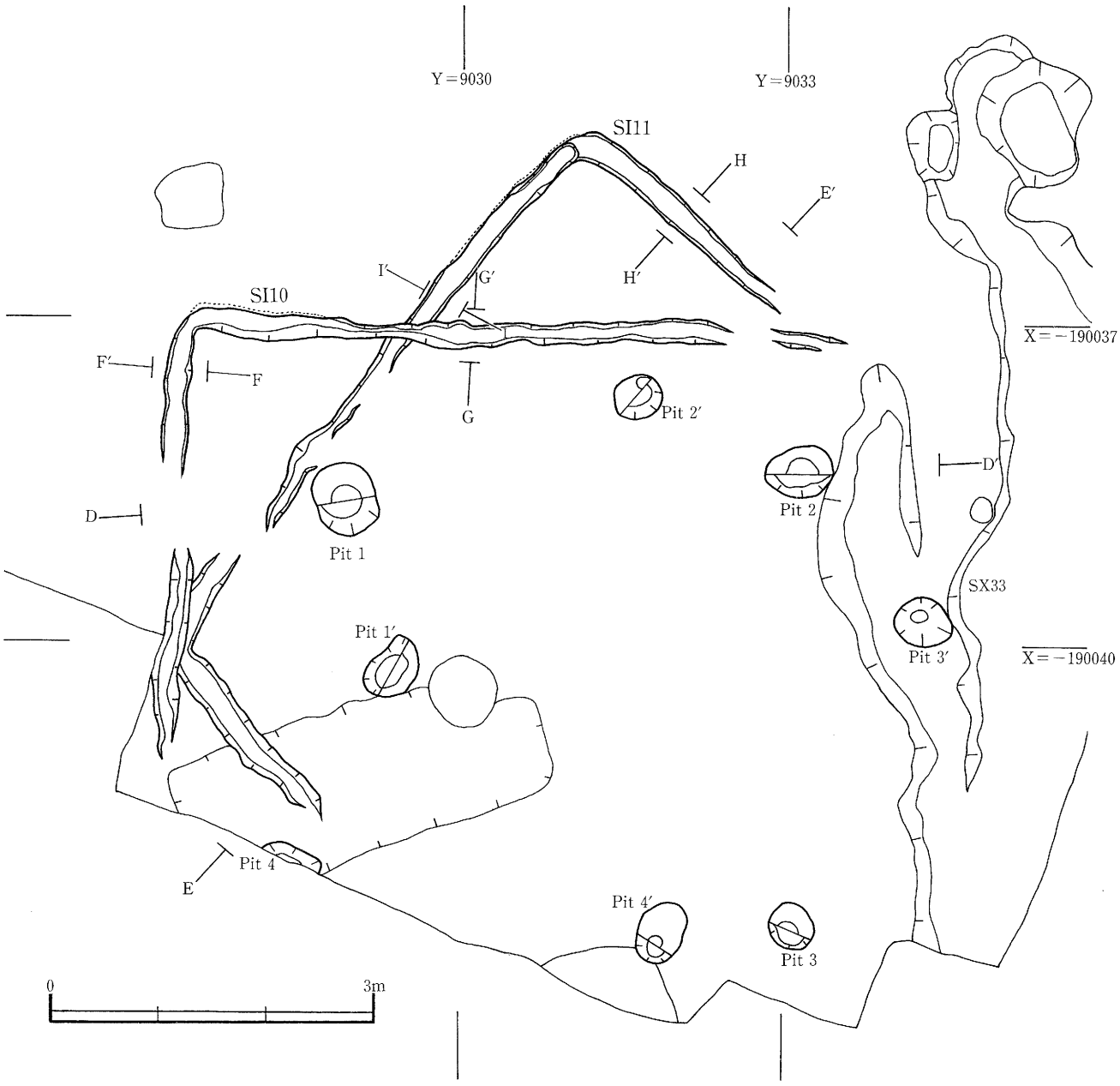




西壁セクション

層位	土色	土性	備考
Ia	10YR2/2 黒褐色	シルト	畑の耕作土・炭化物・焼土粒を含む
Ib	10YR3/2 黒褐色	シルト	畑の耕作土・炭化物・焼土粒を含む
Ic	10YR3/3 黒褐色	シルト質粘土	畑の耕作土・炭化物を微量に含む

第3図　調査区西壁断面図



第4図　SI10・SI11 竪穴住居跡平面図（1/60）

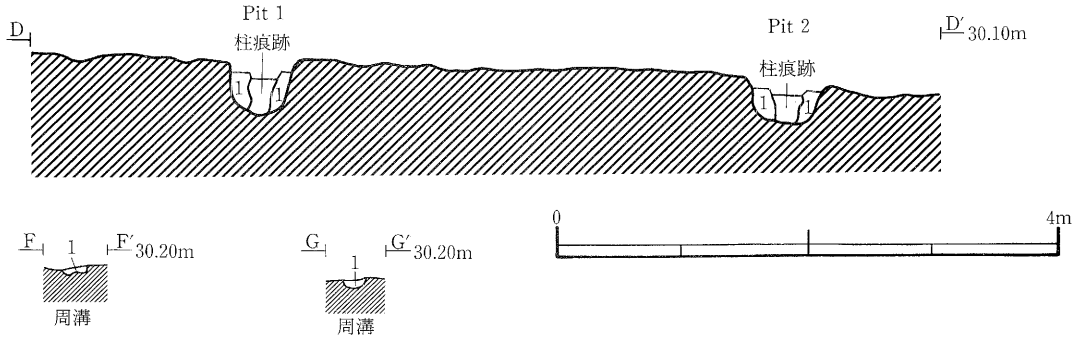
SI11 竪穴住居跡、SK26 土坑を切り、SX33 に切られている。

［出土遺物］　各柱穴掘り方埋め土より縄文土器片、土師器甕片、壷片が少量出土した。

SI11 竪穴住居跡　調査区の東南部で SI10 竪穴住居跡と重複して検出された。遺構の東南部分は調査区外へ延びている。削平のため周溝の一部と柱穴 4 基のみを検出した。平面形は方形で、北辺が5.5m 以上、西辺が6.2m である。方向は、西辺で N－31°－E である。周溝は北辺部と西辺部を検出し、上幅12～20cm、下幅10～18cm、深さ 5 ～16 cmである。周溝内の堆積土は黒褐色シルトである。柱穴の掘り方は、一辺が37～52cm×34～42cmの隅丸長方形で、柱痕跡は16～22cmの円形もしくは楕円形である。柱穴の深さは遺構検出面より19～44cmである。柱間寸法は、3.3～3.9m である。掘り方の埋め土は、褐色シルト、暗褐色シルトである。

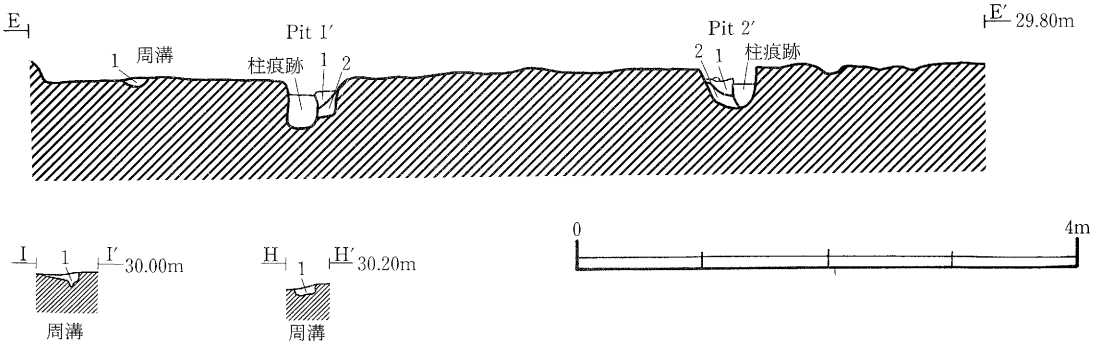
SK26 土坑を切り、SI10 竪穴住居跡、SX33 に切られている。

［出土遺物］　各柱穴掘り方埋め土より土師器坏片、甕片が少量出土した。



遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
周　溝	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	II層をブロック状に含む
Pit 1	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	II層をブロック状に含む
	柱痕	10YR2/3 黒褐色	シルト	II層と礫を多く含む
Pit 2	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	II層と礫を少量含む
	柱痕	10YR3/3 暗褐色	シルト	II層と礫をまばらに含む

第 5 図　SI10 竪穴住居跡断面図

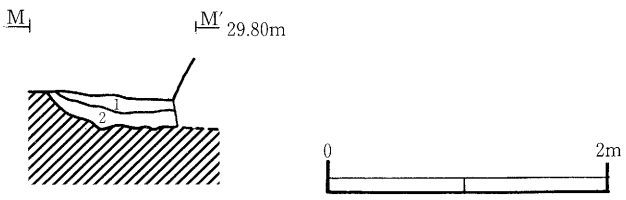


遺構名	層位	土　色	土　性	備　考
周　溝	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	II層を小ブロック状に含む
Pit 1′	1	10YR3/3 暗褐色	シルト	II層をブロック状に含む
	2	10YR3/4 暗褐色	シルト	II層を小ブロック状に含む
	柱痕跡	10YR2/3 黒褐色	シルト	II層と礫を含む
Pit 2′	1	10YR4/6 褐色	シルト	II層をブロック状に含む
	2	10YR4/4 褐色	シルト	II層を多量に含む
	柱痕跡	10YR4/4 褐色	シルト	II層を小ブロック状に含む

第 6 図　SI11 竪穴住居跡断面図

SX 4　調査区の東壁沿いで溝状に一部を検出し、遺構が調査区外へ延びるため全体の形状や規模は不明である。検出総長は、10.2m、上幅は79cm、深さは18～23cmである。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は、黒褐色シルト、暗褐色シルトである。

［出土遺物］　堆積土中より底部に直径４㎜の穿孔のある土師器D－124坏（第17図９）が出土した。その他土師器坏片、赤焼き土器坏片、平瓦片が少量出土した。



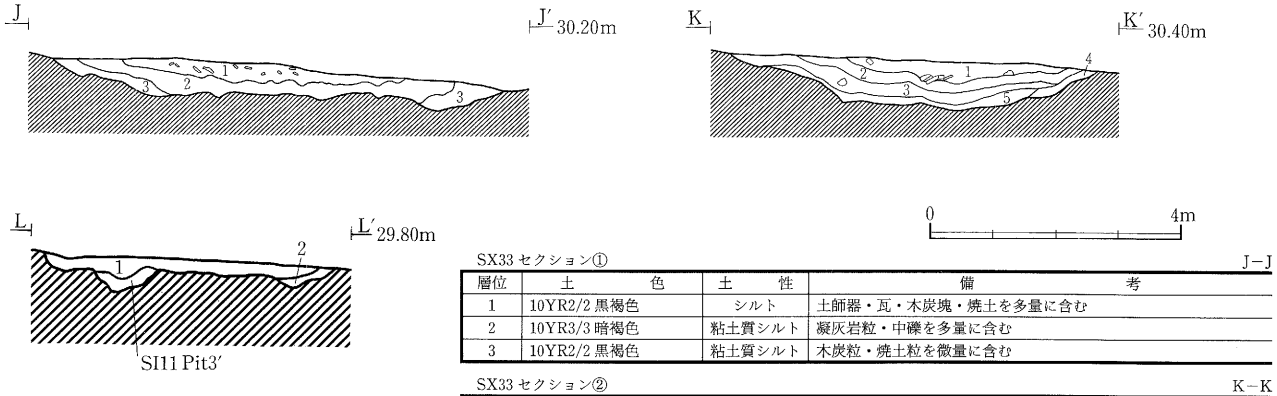
層位	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	凝灰岩粒を少量含む
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	木炭粒・焼土粒を微量に含む

第７図　SX4 断面図

SX33　調査区の東半で検出し、検出総長は23.4m、上幅は178～306cm、下幅は117～240cm、深さは12～41cmで、壁は西壁では緩やかに立ち上がるが東壁ではほぼ直立気味に立ち上がっている。断面形は逆台形で底面は凹凸が著しい。堆積土は、黒褐色シルト及び粘土質シルト、暗褐色シルト及び粘土質シルト、にぶい黄褐色粘土質シルト、灰黄褐色粘土質シルトなどである。多量の土師器坏類が出土している。

SI10、SI11竪穴住居跡を切っている。

［出土遺物］　堆積土中より多量の土師器坏(D－79～81、83～85、87～100、108～110、112～116、125～130)D－107甕（第13図13)、赤焼き土器D－82、86、106坏（第12図１～３)、D－101～105小皿、須恵器E－26壷（第13図14)、F－33～36丸瓦（第14図１～４)、G－64～67平瓦（第14図５～16と第15図１～２)、P－３羽口（第12図９)、P－４カマド支脚(第12図11)、K－25石鏃(図版14－２)、打製石斧の可能性のある石器K－26(図版14－３)、N－11鉄製品（図版14－４)、N－12鉄滓（図版14－５）が出土した。その他にも土師器坏片、甕片、赤焼き土器坏片、丸瓦片、平瓦片、縄文土器片、石器などが出土した。これらのうち土師器坏類はロクロ調整され内面ヘラミガキ・黒色処理されている。ヘラミガキは体部が横方向、底部が放射状である。底部の切り離し技法は回転糸切り無調整であるが、切り離し後手持ちヘラケズリを施しているものが一点含まれている（D－94)。又、体部下端に回転ヘラケズリを施しているもの（D－91）や手持ちヘラケズリを施しているもの（D－112、113）を含み、底部には「×」の線刻のあるもの（D－91、109、110、112、113、114、128)、「－」の線刻のあるもの（D－115、116）がある。赤焼き土器の坏と小皿は、内外面ロクロ調整され、底部の切り離し技法は、回転糸切り無調整である。



第８図　SX33 断面図

SX33 セクション①　J－J

層位	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	土師器・瓦・木炭塊・焼土を多量に含む
2	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒・中礫を多量に含む
3	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	木炭粒・焼土粒を微量に含む

SX33 セクション②　K－K

層位	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	土師器・瓦を多量に含む木炭塊を多量に含む
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	土師器片・凝灰岩粒・木炭粒を少量含む
3	10YR3/2 黒褐色	シルト	凝灰岩粒・中礫を多量に含む
4	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	中礫を多量に含む
5	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	凝灰岩粒を少量含む

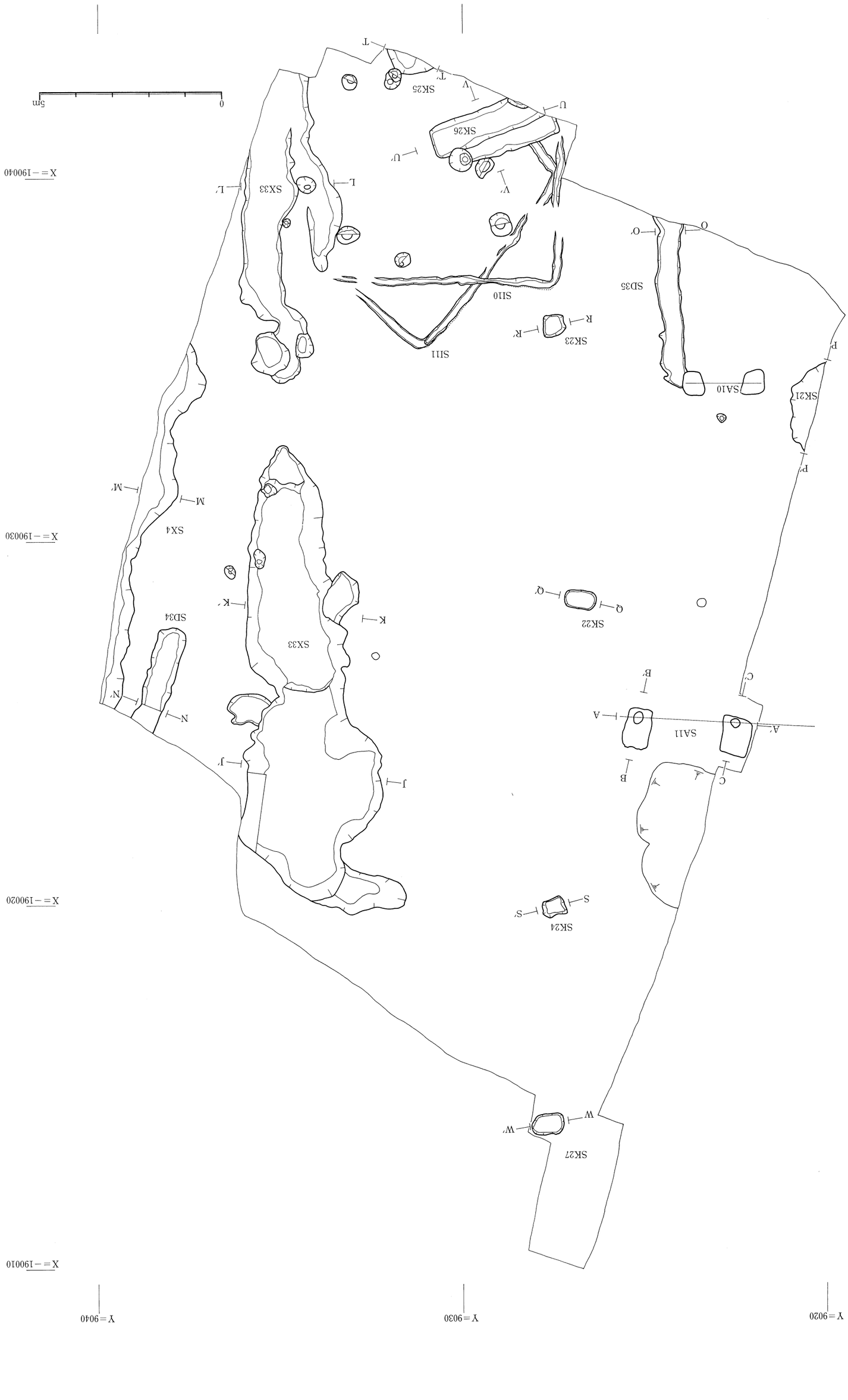
SX33 セクション③　L－L

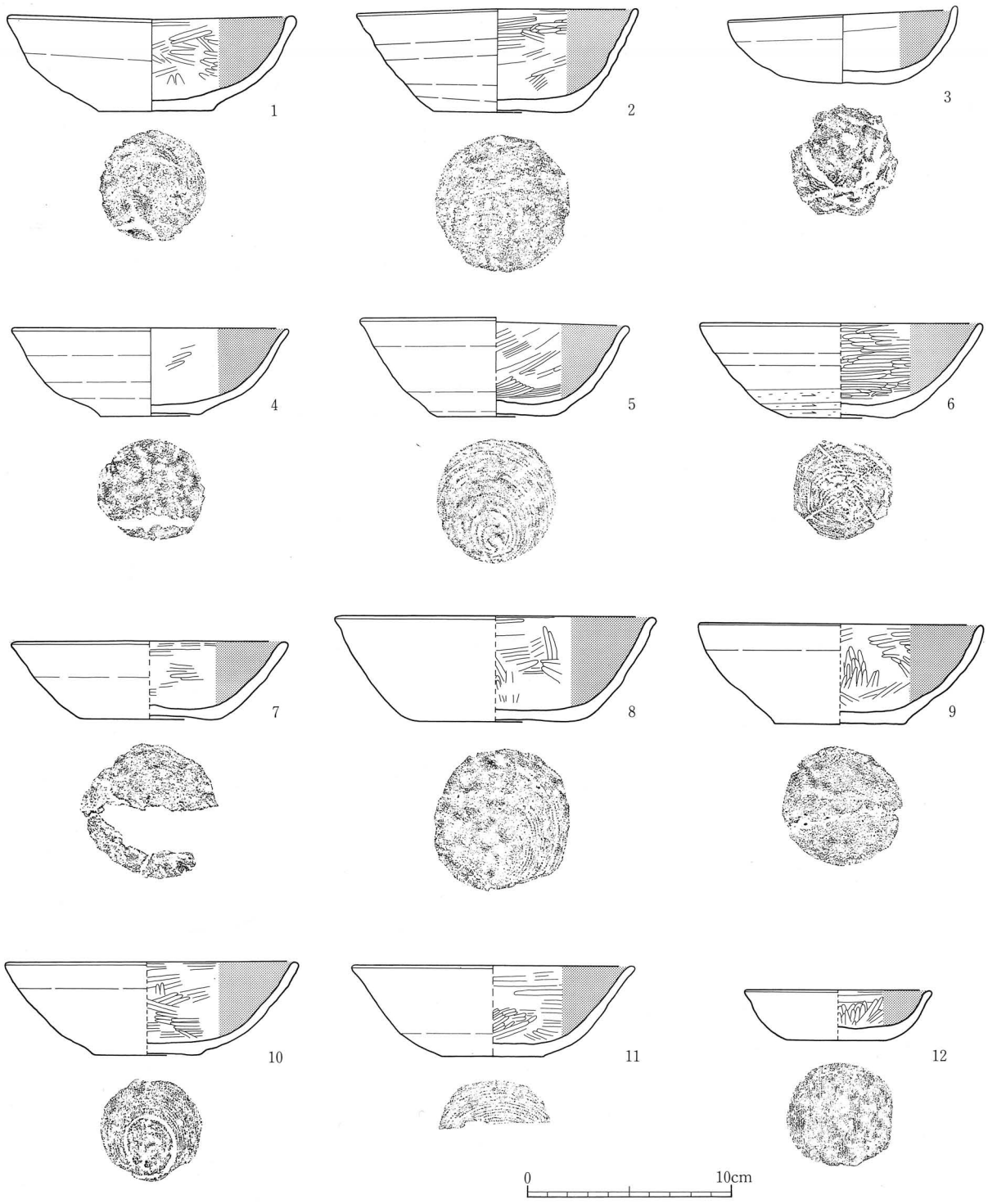
層位	土色	土性	備考
1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	中礫・凝灰岩粒を多量に木炭粒を微量に含む
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	にぶい黄褐色土をブロック状に含む

SI11　Pit 3′

層位	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	中礫・凝灰岩粒を多量に含む

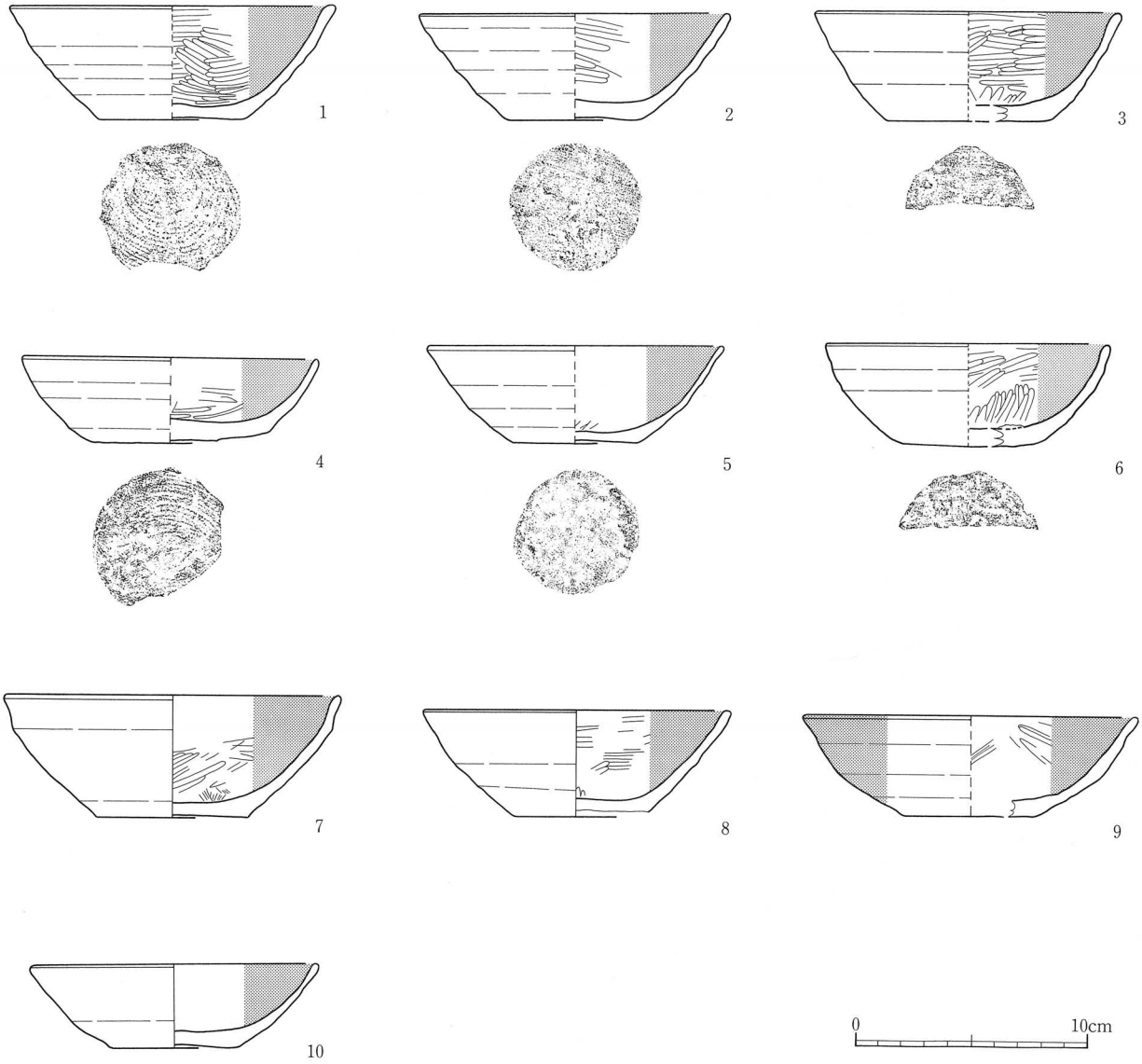
第９図　第11次調査区平面図（1/100）





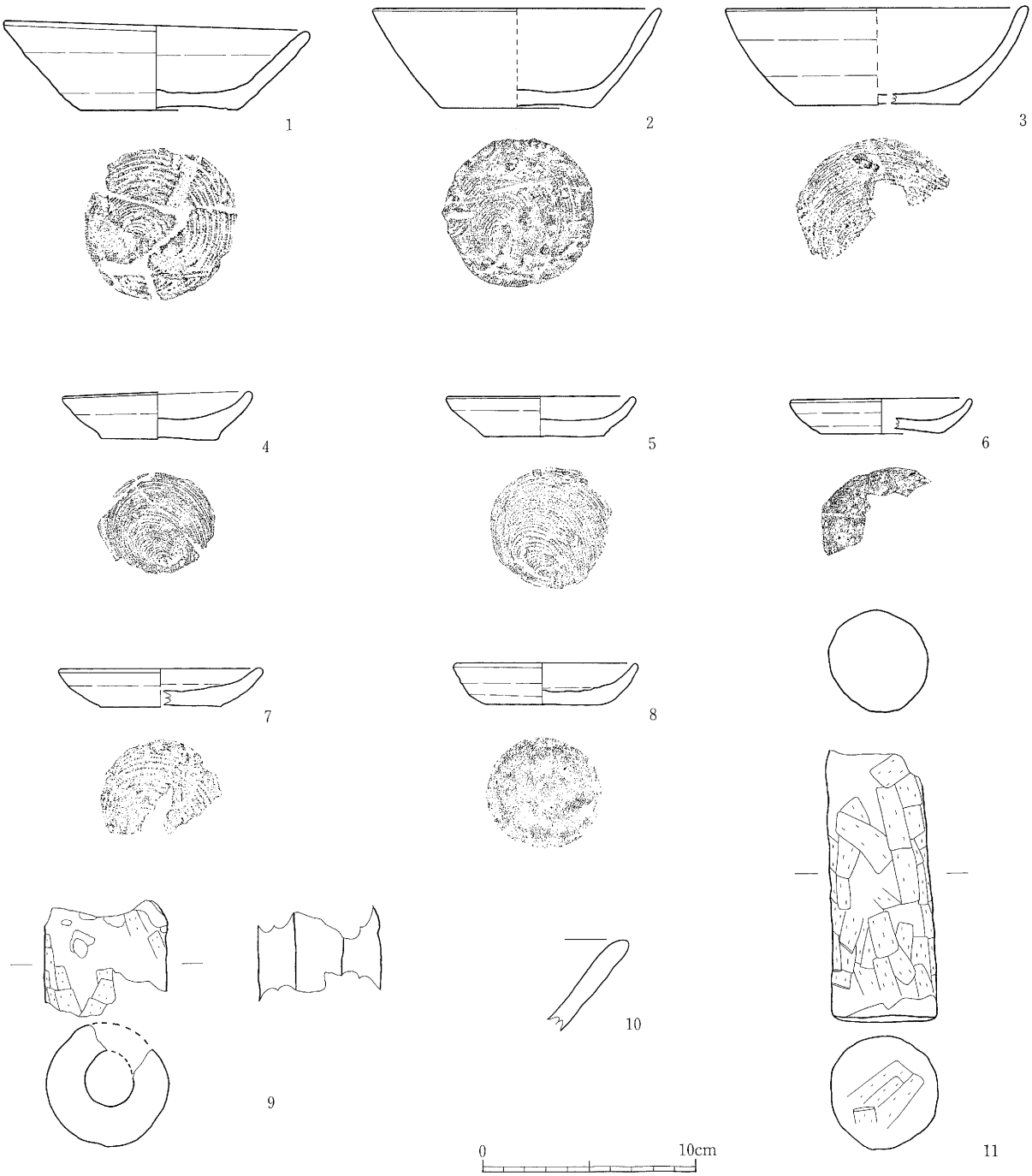
図版番号	登録番号	種別・器形	出土地点		法量(cm)			外面調整			内面調整			備考	写真図版
			遺構	層位	器高	口径	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部		
1	D−80	土師器・坏	SX33	1層	5.0	14.2	5.6	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			灯芯の痕跡あり	11-2
2	D−81	土師器・坏	SX33	1層	5.15	13.8	6.7	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			灯芯の痕跡あり	11-3
3	D−83	土師器・坏	SX33	1層	3.8	11.2	5.0	ロクロナデ			ミガキ・黒色処理			油煙状付着物あり	11-5
4	D−84	土師器・坏	SX33	1層	4.35	13.6	5.0	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			油煙状付着物あり	11-6
5	D−85	土師器・坏	SX33	1層	4.9	(13.7)	5.8	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			灯芯の痕跡あり	
6	D−91	土師器・坏	SX33	1層	4.7	(13.8)	5.1	ロクロナデ・ヘラケズリ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			油煙状付着物あり「×」の線刻	12-13
7	D−87	土師器・坏	SX33	1層	3.9	(13.6)	6.8	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			油煙状付着物あり	11-8
8	D−88	土師器・坏	SX33	1層	5.2	(15.8)	7.8	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			灯芯の痕跡あり	11-9
9	D−89	土師器・坏	SX33	1層	5.0	(14.0)	6.4	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理				11-10
10	D−95	土師器・坏	SX33	1層	4.6	(14.5)	5.4	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理				11-15
11	D−96	土師器・坏	SX33	1層	4.5	(13.9)	5.1	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理				11-16
12	D−99	土師器・坏	SX33	1層	2.5	(9.2)	(5.2)	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			油煙状付着物あり	11-19

第10図　SX33 出土遺物 (1)



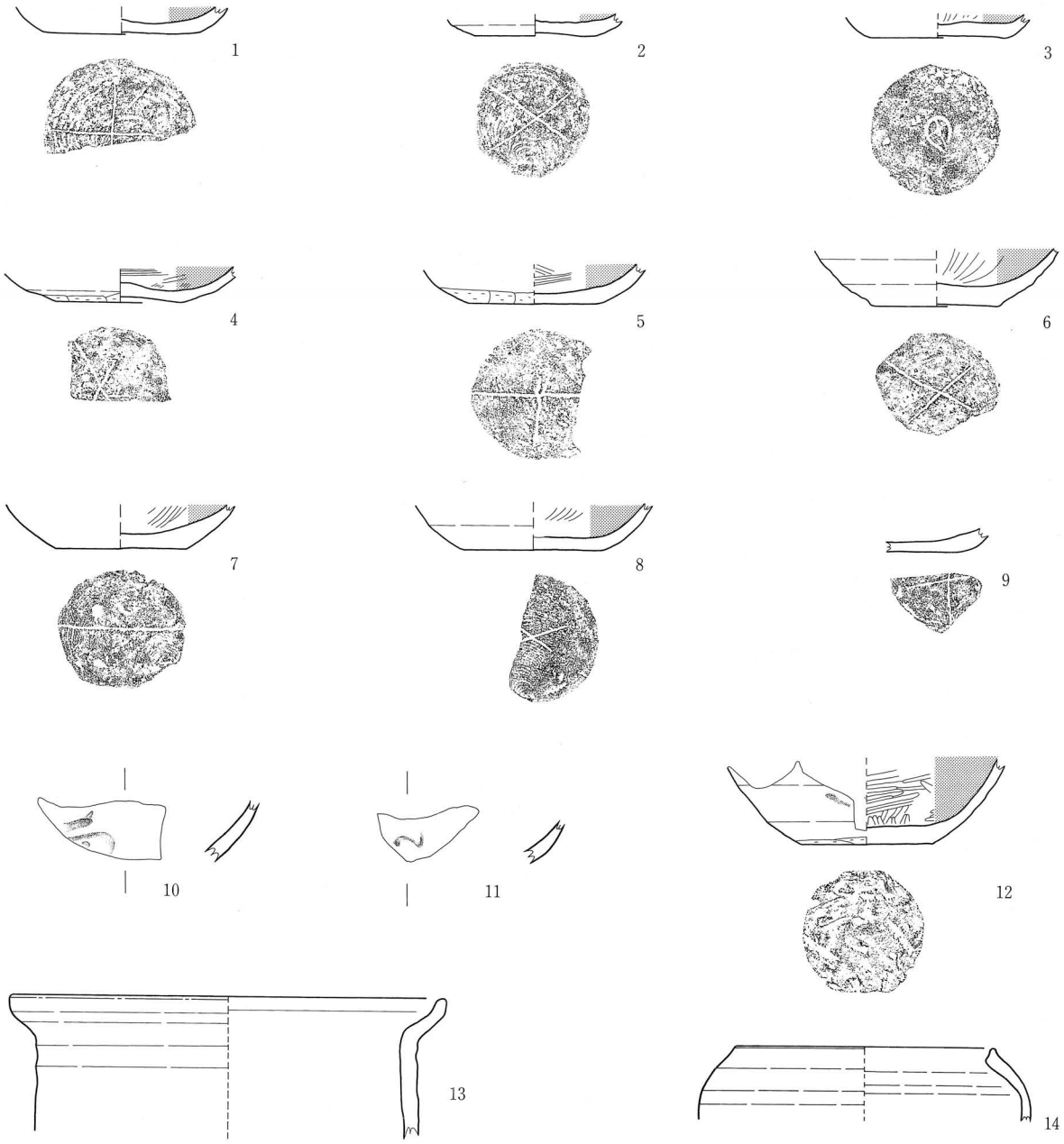
図版番号	登録番号	種別・器形	出土地点		法量 (cm)			外面調整			内面調整			備考	写真図版
			遺構	層位	器高	口径	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部		
1	D－ 93	土師器・坏	SX33	1層	4.95	(14.0)	6.4	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			油煙状付着物あり	11-13
2	D－118	土師器・坏	SX33	1層	4.6	(13.4)	5.8	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			油煙状付着物あり	11-22
3	D－ 98	土師器・坏	SX33	1層	4.8	(13.2)	(7.2)	ロクロナデ			ミガキ・黒色処理			油煙状付着物あり、摩滅が著しい	11-18
4	D－ 92	土師器・坏	SX33	1層	3.7	(12.8)	6.6	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理				11-12
5	D－126	土師器・坏	SX33	1層	4.2	(12.8)	5.3	ロクロナデ			ミガキ・黒色処理			底部摩滅	11-23
6	D－ 97	土師器・坏	SX33	1層	4.5	(12.2)	(5.6)	ロクロナデ			ミガキ・黒色処理			油煙状付着物あり、底部摩滅	11-17
7	D－ 90	土師器・坏	SX33	1層	5.3	(7.6)	6.5	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			油煙状付着物あり	11-11
8	D－ 79	土師器・坏	SX33	1層	4.6	13.3	5.8	ロクロナデ			ミガキ・黒色処理			油煙状付着物あり	11-1
9	D－100	土師器・坏	SX33	1層	(4.35)	(14.4)	(5.6)	ロクロナデ・黒色処理			ミガキ・黒色処理				11-20
10	D－127	土師器・坏	SX33	1層	3.65	(12.2)	5.4	ロクロナデ		回転糸切り	黒色処理			全体に摩滅が著しい	11-24

第11図　SX33 出土遺物 (2)



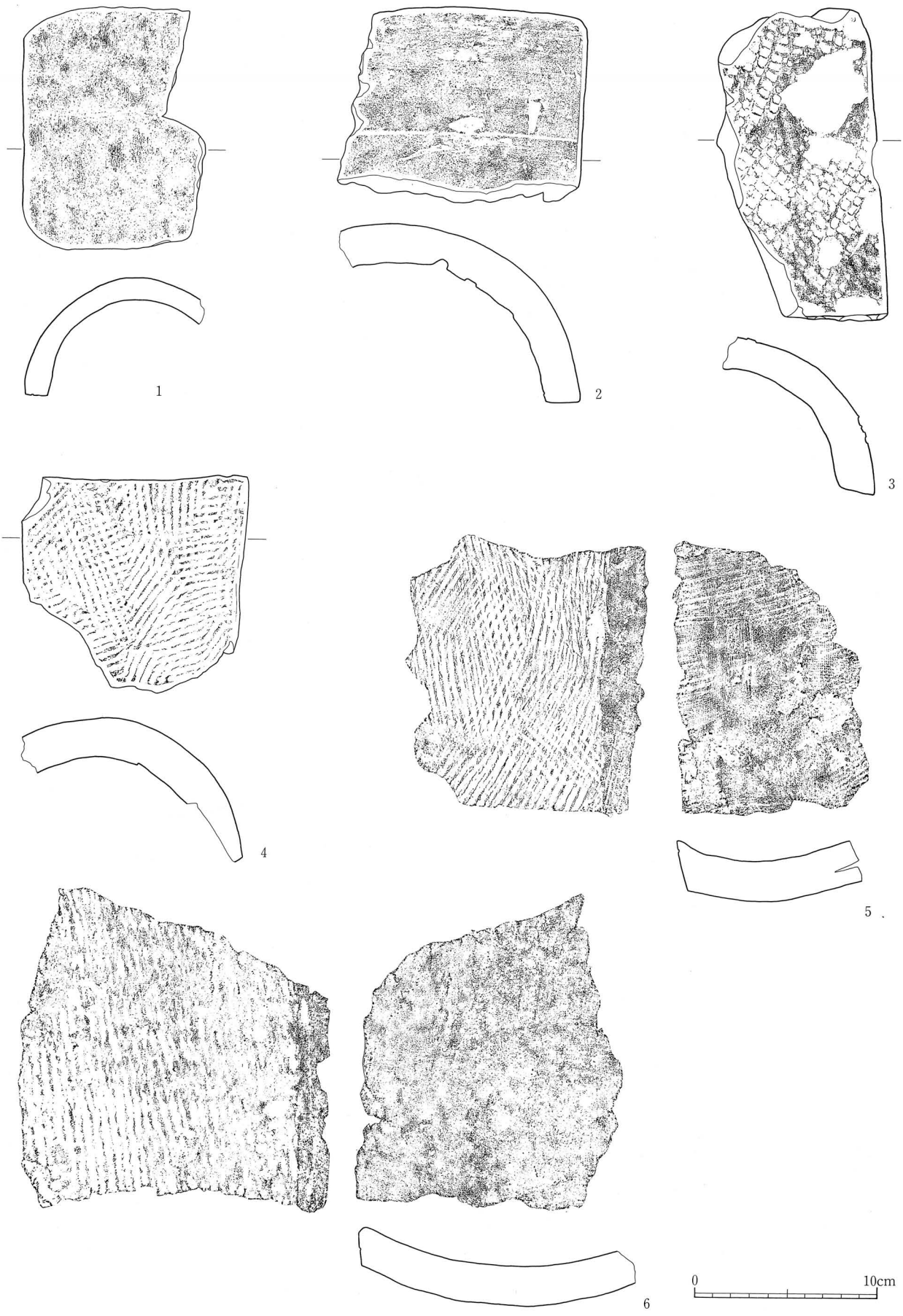
図版番号	登録番号	種別・器形	出土地点		法量 (cm)			外面調整			内面調整			備考	写真図版
			遺構	層位	器高	口径	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部		
1	D－ 82	赤焼き土器・坏	SX33	1層	4.2	14.3	7.4	ロクロナデ		回転糸切り	ロクロナデ			灯芯の痕跡あり	11-4
2	D－ 86	赤焼き土器・坏	SX33	1層	4.7	(13.6)	7.4	ロクロナデ		回転糸切り	ロクロナデ			摩滅している	11-7
3	D－106	赤焼き土器・坏	SX33	1層	(4.6)	14.2	(7.8)	ロクロナデ		回転糸切り	ロクロナデ				11-21
4	D－101	赤焼き土器・小皿	SX33	1・2層	2.2	8.9	5.4	ロクロナデ		回転糸切り	ロクロナデ				12-2
5	D－102	赤焼き土器・小皿	SX33	1層	1.9	8.9	5.7	ロクロナデ		回転糸切り	ロクロナデ				12-3
6	D－103	赤焼き土器・小皿	SX33	1層	(1.65)	(8.6)	(5.6)	ロクロナデ		回転糸切り	ロクロナデ			摩滅が著しい、灯芯の痕跡あり	12-4
7	D－104	赤焼き土器・小皿	SX33	1層	1.8	9.6	5.6	ロクロナデ		回転糸切り	ロクロナデ				12-5
8	D－105	赤焼き土器・小皿	SX33	1層	1.95	8.4	5.4	ロクロナデ		回転糸切り	ロクロナデ			摩滅が著しい	12-6
9	P－ 3	土製品・フイゴ羽口	SX33	1層	(5.5)	外径 5.8	内径 2.3		ヘラケズリ					鉄滓付着	14-8
10	D－129	赤焼き土器・鉢	SX33	1層	(4.3)	－	－	ロクロナデ			ロクロナデ				12-11
11	P－ 4	土製品・カマド支脚	SX33	1層	(12.8)	－	5.2		ヘラケズリ					再酸化	14-7

第12図　SX33 出土遺物 (3)

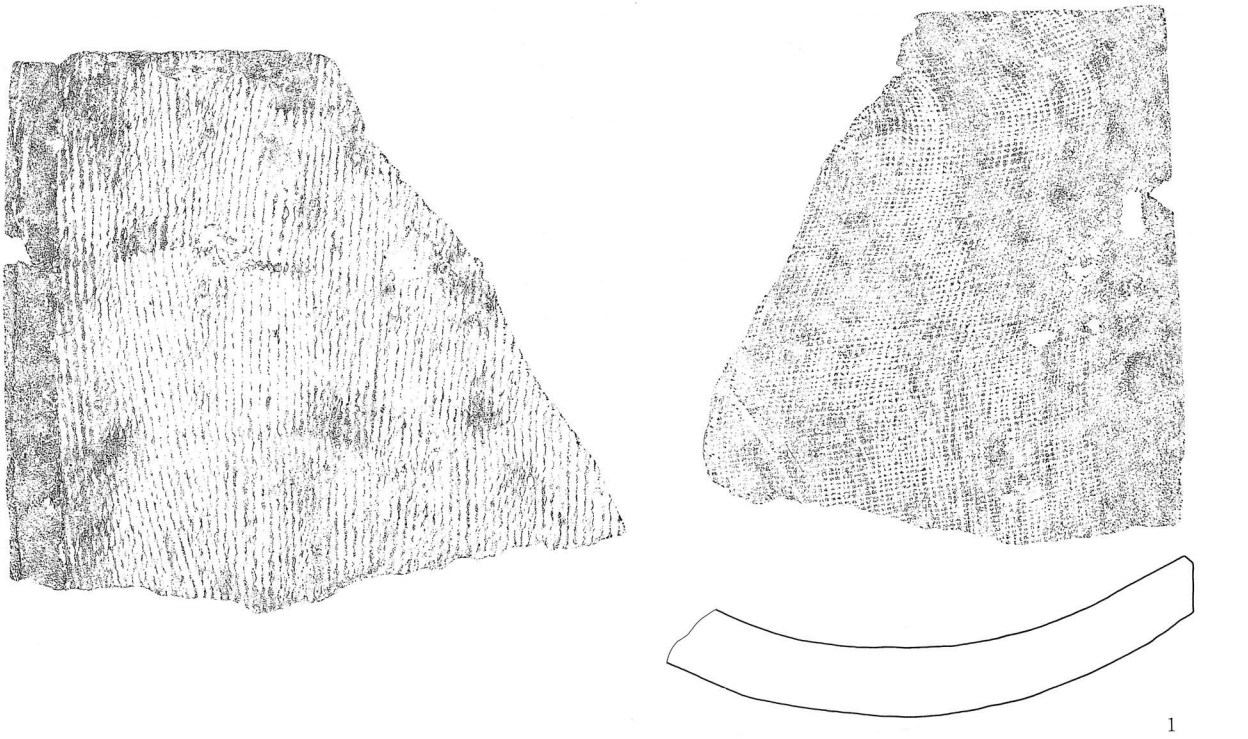


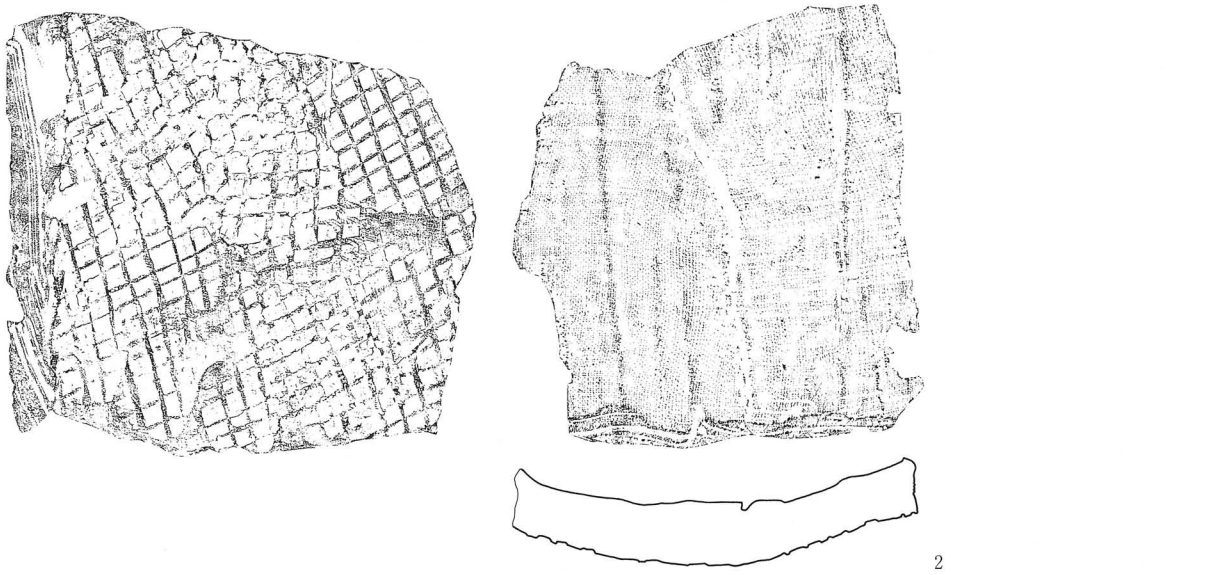
図版番号	登録番号	種別・器形	出土地点		法量(cm)			外面調整			内面調整			備考	写真図版
			遺構	層位	器高	口径	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部		
1	D−108	土師器・坏	SX33	1層	−	−	7	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			油煙状付着物・「＋」の線刻	12-14
2	D−109	土師器・坏	SX33	1層	−	−	5.3	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			「×」の線刻	12-15
3	D−110	土師器・坏	SX33	1層	−	−	5.9	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			「⊗」の線刻	12-16
4	D−112	土師器・坏	SX33	1層	−	−	5.6	ロクロナデ→ヘラケズリ		回転糸切り→ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理			「×」の線刻	12-17
5	D−113	土師器・坏	SX33	1層	−	−	6	ロクロナデ→ヘラケズリ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			油煙状付着物・「＋」の線刻	12-18
6	D−114	土師器・坏	SX33	1層	−	−	5.6	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			「×」の線刻	12-19
7	D−115	土師器・坏	SX33	1層	−	−	5.9	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			「−」の線刻	12-20
8	D−128	土師器・坏	SX33	1層	−	−	6.2	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			「×」の線刻	12- 1
9	D−116	土師器・坏	SX33	1層	−	−	−	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			「×」の線刻	12- 7
10	D−125	土師器・坏	SX33	1層	−	−	−	ロクロナデ			ミガキ・黒色処理			墨書あり	12- 9
11	D−130	土師器・坏	SX33	1層	−	−	−	ロクロナデ			ミガキ・黒色処理			墨書あり	12- 8
12	D− 94	土師器・坏	SX33	1層	−	−	6.0	ロクロナデ→ヘラケズリ		ヘラケズリ	ミガキ・黒色処理			墨書あり、油煙状付着物	11-14
13	D−107	土師器・甕	SX33	1層	−	19.6	−	ロクロナデ			ロクロナデ				12-10
14	E− 26	須恵器・壷	SX33	1層	−	−	−	ロクロナデ			ロクロナデ				12-12

第13図　SX33 出土遺物 (4)



第14図　SX33 出土遺物 (5)





図版番号	登録番号	種別器形	出土地点 遺構	出土地点 層位	特徴	備考	写真図版
14－1	F－33	丸瓦	SX33	1層	凸面 ナデ　凹面 布目痕→ケズリ		13-1
14－2	F－35	丸瓦	SX33	1層	凸面 ナデ・工具痕　凹面 布目痕		13-3
14－3	F－36	丸瓦	SX33	1層	凸面 格子叩き、一部スリ消し　凹面 布目痕、糸切り痕		13-4
14－4	F－34	丸瓦	SX33	1層	凸面 平行叩き　凹面 布目痕		13-2
14－5	G－64	平瓦	SX33	1層	凸面 平行叩き　凹面 布目痕		13-5
14－6	G－66	平瓦	SX33	1層	凸面 縄叩き　凹面 布目痕→ナデ		13-7
15－1	G－65	平瓦	SX33	1層	凸面 縄叩き　凹面 布目痕		13-6
15－2	G－67	平瓦	SX33	1層	凸面 格子叩き　凹面 布目痕、模骨痕		13-8

第15図　SX33 出土遺物 (6)

出土遺物の90%以上を土師器坏類が占めており、その数は300個体を越えるものと考えられる。その中には坏の内外面に油煙状の付着物（D－79、83、84、87、90、91、92、93、98、99）や灯芯の痕跡（D－80、81、82、85、88、103）が認められるものが含まれている。出土した瓦のうち、G－65、66平瓦は凸面縄叩き、凹面に粗い布目痕が認められる。

SD34 溝跡　総長2.8m 以上で、南北方向に延びる溝跡である。上幅72～78cm、下幅42～52cm、深さ 5 ～17cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は扁平な逆台形である。底面はほぼ平坦である。方向は N－8°－E で、堆積土は暗褐色粘土質シルトである。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

SD35 溝跡　総長4.6m 以上で、南北方向に延びる溝跡である。上幅53～79cm、下幅36～62cm、深さ 9 ～15cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面形は舟底形である。底面は凹凸が著しい。方向は N－9°－W で、堆積土は黒褐色シルトである。

SA10 柱列を切っている。

［出土遺物］　堆積土中よりカエリのない須恵器 E－25 蓋（第17図10）の他、土師器坏片、甕片、赤焼き土器坏片、平瓦片が少量出土した。

SK21 土坑　南北250cm以上、東西80cm以上の楕円形の土坑で、深さは50cmである。底面は摺り鉢状である。堆積土は、暗褐色シルト、黒褐色シルト、灰黄褐色シルト質粘土である。

［出土遺物］　堆積土中より須恵器坏片、平瓦片が少量出土した。

SK22 土坑　南北49cm、東西86cmの隅丸長方形の土坑で、深さは54cmである。底面は平坦である。堆積土は褐色シルト質粘土、暗褐色シルト質粘土である。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

SK23 土坑　南北53cm、東西59cmの隅丸長方形の土坑で、深さは60cmである。底面は平坦である。堆積土は黒褐色シルトである。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

SK24 土坑　南北47cm、東西60cmのやや不整な隅丸長方形の土坑で、深さは18cmである。底面は凹凸が著しい。堆積土は褐色シルト質粘土である。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

SK25 土坑　南北105cm以上、東西137cm以上の円形の土坑で、深さは23cmである。底面は平坦である。堆積土は暗褐色シルト質粘土である。

SI10、SI11 竪穴住居跡を切っている。

［出土遺物］　堆積土中よりロクロ調整され、内面ヘラミガキ・黒色処理されている土師器 D－117 坏（第17図 8 ）、K－24 石鏃（図版14－ 1 ）が出土した他、土師器坏片、鉄滓が出土した。

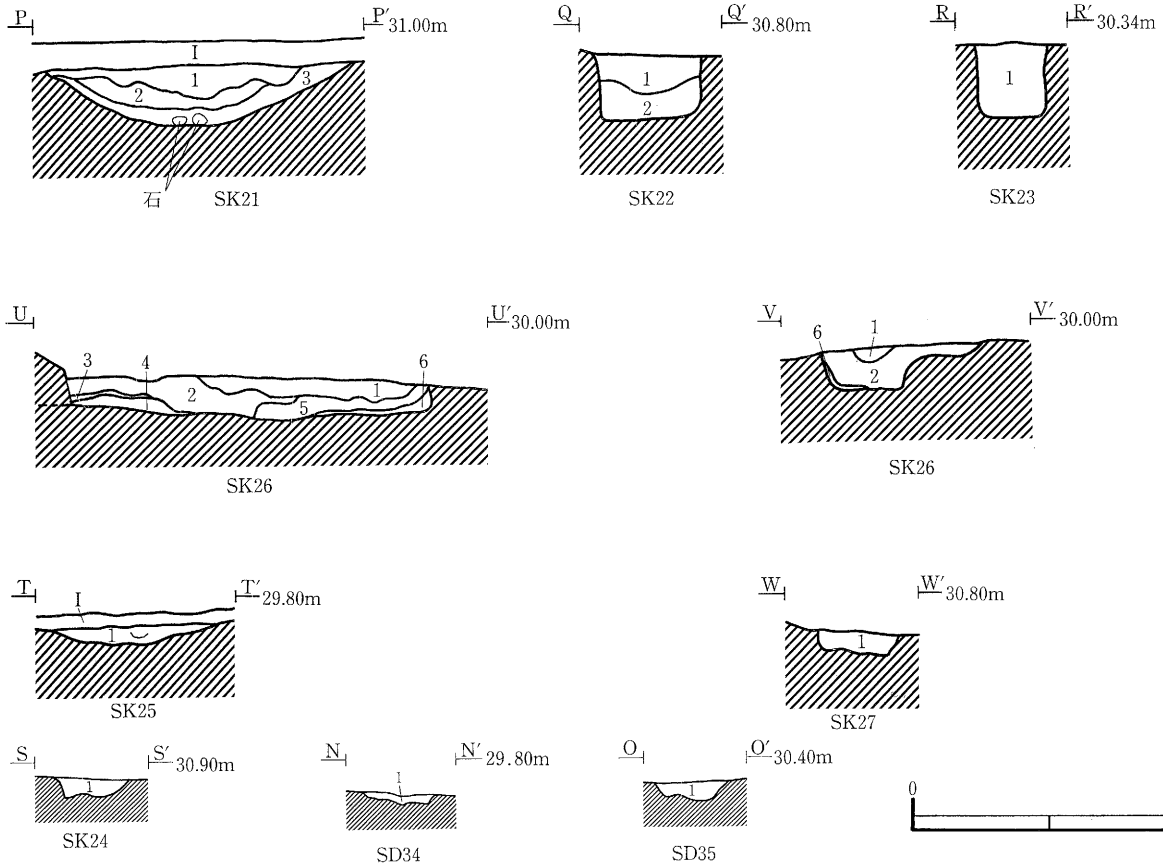
SK26 土坑　南北132cm、東西330cmの隅丸長方形の土坑で、深さは33cmである。底面は平坦である。堆積土は、黒色粘土質シルト、黒褐色シルト及び粘土質シルト、暗褐色粘土質シルト及び粘土、にぶい黄褐色粘土質シルトである。

SI10、SI11 竪穴住居跡に切られている。

［出土遺物］　堆積土中より土師器坏片、甕片、須恵器壷片、縄文土器片が出土した。

SK27 土坑　南北49cm、東西83cmのやや不整な長方形の土坑で、深さは18cmである。底面は凹凸が著しい。堆積土は、褐色シルト質粘土である。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。



SK21 セクション　P−P′

層位	土色	土性	備考
I	10YR3/3 暗褐色	シルト	焼土粒・木炭粒を少量含む
1	10YR3/4 暗褐色	シルト	褐灰色粘土質シルトをブロック状に含む。小礫を少量含む。
2	10YR2/2 黒褐色	シルト	小礫を少量含む
3	10YR4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	小礫を多量に含む

SK22 セクション　Q−Q′

層位	土色	土性	備考
1	7.5YR4/4 褐色	シルト質粘土	小礫を多量に含む
2	7.5YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	凝灰岩粒・小礫を少量含む

SK23 セクション　R−R′

層位	土色	土性	備考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	II層をブロック状に多量に含む

SK24 セクション　S−S′

層位	土色	土性	備考
1	7.5YR4/6 褐色	シルト質粘土	小礫を少量含む

SK25 セクション　T−T′

層位	土色	土性	備考
I	10YR4/2 灰黄褐色	粘土質シルト	表　土
1	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	炭化物・土器片を含む

SK26 セクション　U−U′　V−V′

層位	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	小礫を多量に含む
2	7.5YR3/1 黒褐色	粘土質シルト	橙色の粘土をブロック状に含む
3	10YR2/1 黒色	粘土質シルト	
4	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	黒色土を微量に含む
5	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	
6	7.5YR3/4 暗褐色	粘　土	凝灰岩粒を少量含む

SK27 セクション　W−W′

層位	土色	土性	備考
1	10YR4/4 褐色	シルト質粘土	中礫を多量に含む

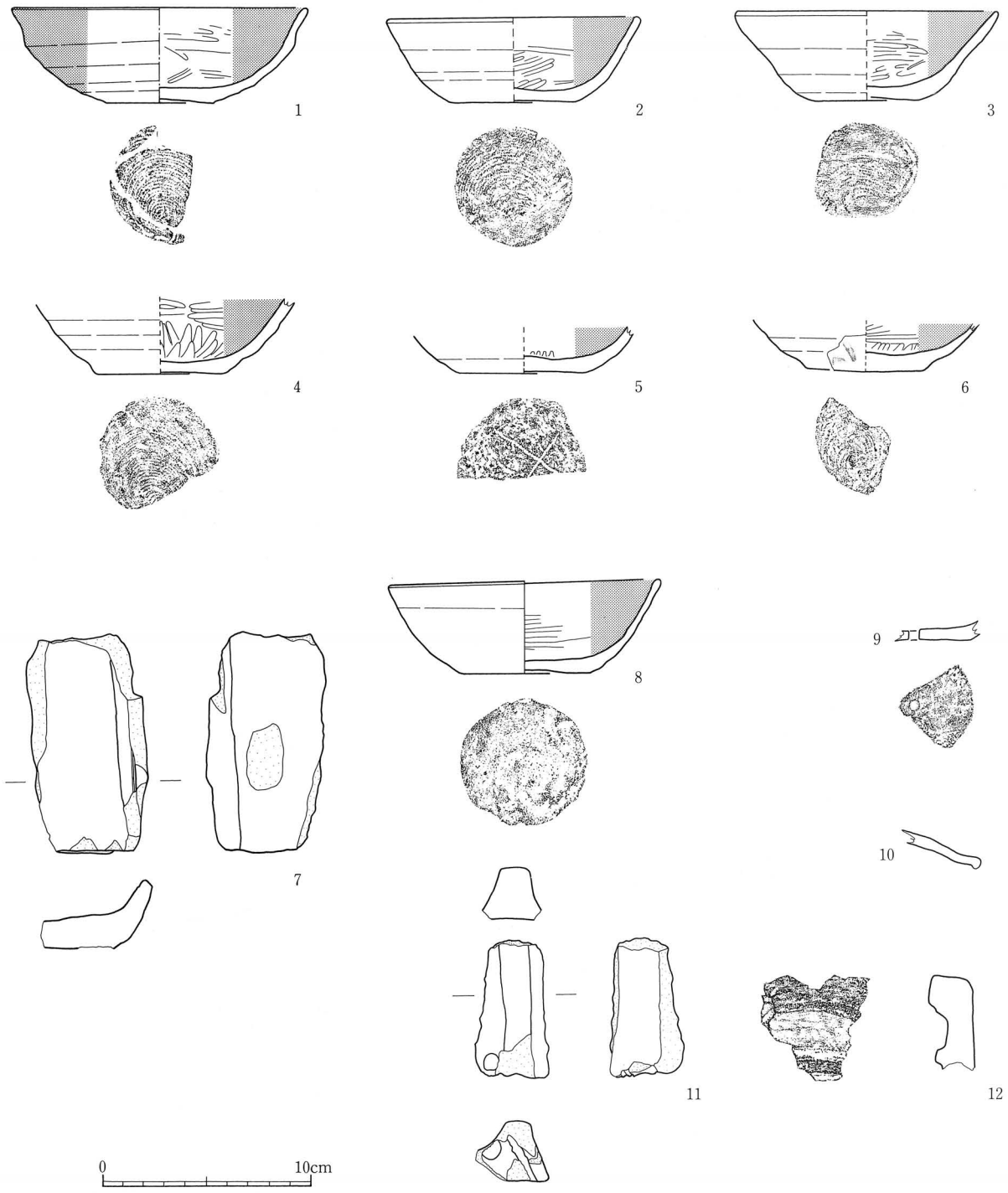
SD34 セクション　N−N′

層位	土色	土性	備考
1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	小礫・II層をブロック状に含む

SD35 セクション　O−O′

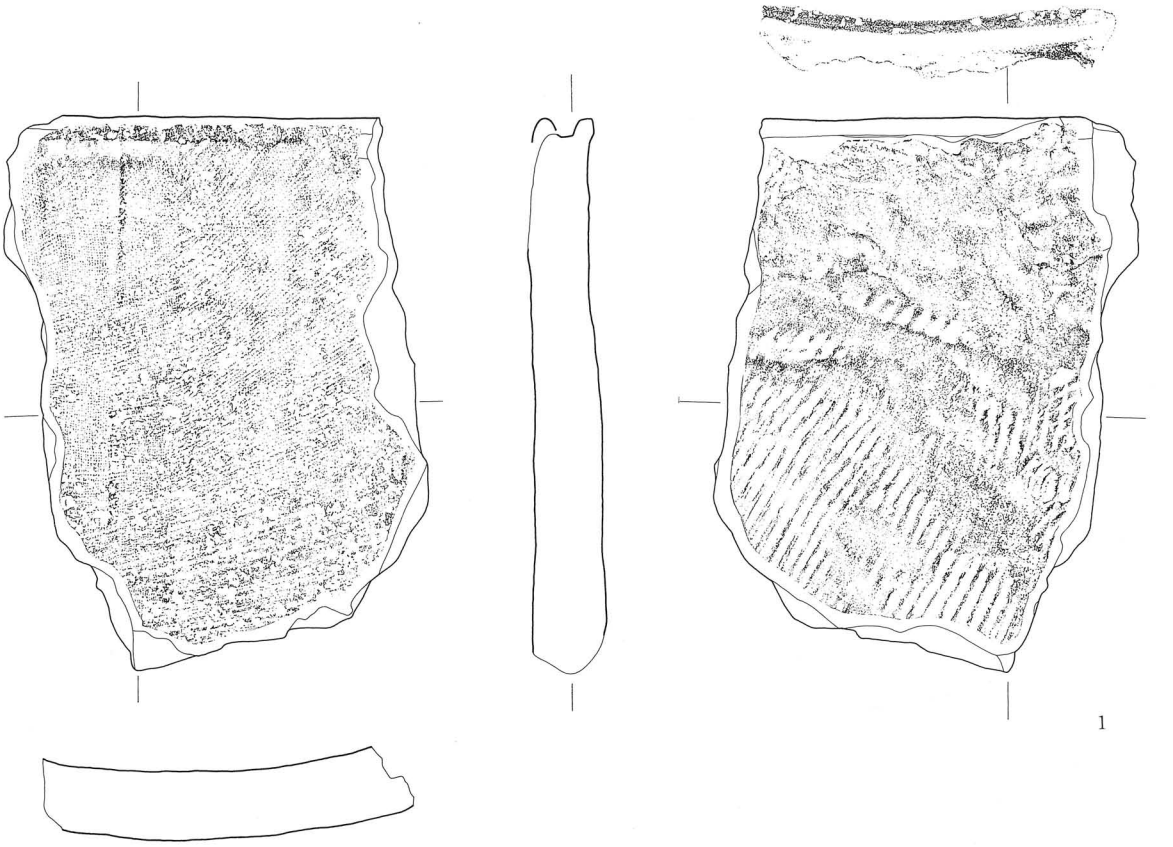
層位	土色	土性	備考
1	10YR2/2 黒褐色	シルト	凝灰岩粒・中礫を多量に含む

第16図　第11次調査断面図（土坑・溝跡）



図版番号	登録番号	種別・器形	出土地点		法量(cm)			外面調整			内面調整			備考	写真図版
			遺構	層位	器高	口径	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部		
1	D−121	土師器・坏	遺構検出面		4.6	(14.2)	5.1	ロクロナデ・黒色処理		回転糸切り	ミガキ・黒色処理				14-14
2	D−122	土師器・坏	遺構検出面		4.1	(12.2)	6.0	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理				14-15
3	D−120	土師器・坏	遺構検出面		4.3	12.6	5.0	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			油煙状付着物	14-13
4	D−119	土師器・坏	遺構検出面		−	−	6.4	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理				14-11
5	D−111	土師器・坏	遺構検出面		−	−	6.4	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			「×」の線刻	14-17
6	D−123	土師器・坏	遺構検出面		−	−	(5.8)	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理			墨書あり	14-16
7	E−27	硯	遺構検出面		凸面・凹面 ヘラケズリ									風字硯	14-18
8	D−117	土師器・坏	SK25	1層	4.5	13	6.4	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ・黒色処理				14-6
9	D−124	土師器・坏	SX 4	1層	−	−	−	−		穿孔	ミガキ・黒色処理				14-9
10	E−25	須恵器・蓋	SD35	1層	−	−	−	ロクロナデ			ロクロナデ				14-10
11	F−37	不明	遺構検出面		凸面 ヘラケズリ・布目痕有り 凹面 二次剝離										14-19
12	F−38	軒丸瓦	遺構検出面		瓦当面歯車文 凸面 ケズリ										14-20

第17図　第11次調査出土遺物（1）



図版番号	登録番号	種別器形	出土地点 遺構	出土地点 層位	特徴	写真図版
1	G-68	軒平瓦	遺構検出面		凸面 平行叩き、凹面 布目痕・模骨痕・ロクロ挽き重弧文軒平瓦	14-21
2	G-69	平　瓦	遺検・SX33	1層	凸面 平行叩き、凹面 布目痕・模骨痕	14-24

第18図　第11次調査出土遺物 (2)

3．ま と め

今回の第11次調査で発見された遺構は、柱列２列、溝跡２条、竪穴住居跡２軒、土坑７基、性格不明遺構２基、小柱穴、ピットなどである。ここでは、以下の項目について若干の考察を加え「まとめ」としたい。

(1) SA10・11柱列について

今回の調査では、一昨年の第９次調査で発見した寺院の主要な建物と見られるSB ３掘立柱建物跡の東側と北東側においてSA10・SA11を検出した。SA10は、削平のため遺構の遺存状況がきわめて悪く、掘り方の底面付近を検出したのみであるが、各々の掘り方の形状や規模がほぼ同一であることと真東西方向に並ぶことから柱列と考えたい。

SA11は、真東西方向に一間分のみ検出し、さらに西側に延びていく可能性が残されている。柱穴は、２段に掘り込まれ、南壁がえぐられるように横方向に掘られている。また、柱痕跡もそれにあわせて北側に斜めに傾いているなど特殊な様相を示し、上部構造については明らかでない。年代は、SA10･11とも掘り方の埋め土にロクロ土師器片や赤焼き土器片以外の遺物がみられないことから、９世紀後半以降でも古代の中で捉えられるものと考えられる。遺構の性格については、それぞれ一間分のみの検出に留まっており、全容が不明であるため明らかにし得なかった。

(2) SX33出土遺物について

今回の調査で、SX33より多量の土師器坏類を含む遺物が出土した。出土した遺物には土師器の他に、赤焼き土器坏、小皿、須恵器壷、丸瓦、平瓦、羽口、土製支脚、石器、鉄製品がある。図示した遺物の中で全体の器形の把握が可能なものは、土師器坏22点、赤焼き土器坏３点、赤焼き土器小皿５点である。

このうち年代の検討が可能な土師器坏、赤焼き土器坏・小皿について若干の考察を加えたい。

SX33から出土した土師器坏は、すべてロクロ調整され、内面はヘラミガキ･黒色処理されている。このような土師器は東北地方南部の土師器編年型式の表杉ノ入式に該当するものである(註１)。表杉ノ入式の土師器坏については主に、須恵器・赤焼き土器との共伴関係、口径に対する底径の比率（以下、底口比と略す。)、製作技法などにより編年的細分が試みられており、表１のような変遷が辿れる。これによれば、年代が降るに従って、坏類全体の中で赤焼き土器坏の占める割合が増加し、須恵器坏の割合が減少・消失する。また、底口比が減少し、器面再調整が簡略化される傾向にあるとされている（註２)。

遺跡名 出土遺構名	宮前 SI20 IV A群	青木 SI21	台ノ山 SI 8	東山 土器溜	家老内 SI 2	宮前 SI54 IV B群	安久東 SI 2	清水 SD 9 内SK 1	鹿島 SK 1・SK 4	植田前 SD 1・SD 2
赤焼き土器出土率	0％	0％	0％	0％	0％	0％	45%	42%	63%	98%
須恵器出土率	28%	18%	53%	31%	0％	0％	11%	6％	0％	0％
底口比	0.6	0.52	0.52	0.46	0.44	0.43	0.36	0.38	0.39	0.4
外面調整	ロクロナデ 回転ケズリ	ロクロナデ 回転ケズリ 手持ちケズリ	ロクロナデ 回転ケズリ 手持ちケズリ	ロクロナデ 回転ケズリ 手持ちケズリ	ロクロナデ 手持ちケズリ	ロクロナデ 手持ちケズリ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ
切り離し技法	ヘラ切り	ヘラ切り 糸切り	ヘラ切り 糸切り	糸切り	糸切り	糸切り	糸切り	糸切り	糸切り	糸切り
年代	8C末～9C初	9C中葉				10C前半		10C中葉		

表１　表杉ノ入式期における土師器坏の変遷

SX33から出土した土師器坏の特徴をあげると以下のようになる。第１に、赤焼き土器を共伴しているが須恵器を含まないこと。第２に、底口比は0.37～0.55の範囲に分布し0.39前後に集中していること。第３に、外面調整は体部下端に回転ヘラケズリを施しているものを１点含むほか(D－91)は、底部回転糸切り無調整のものが主体(21点)を占めていることである。以上の特徴を表１の変遷に当てはめると、須恵器坏を含まない点や底口比から鹿島遺跡SK １・SK ４出土土器群の傾向に近いことが窺える。鹿島遺跡SK １・SK ４出土土器群については、10世紀中葉の年代が与えられている。従ってSX33出土土師器にも概ね10世紀中葉頃の年代が考えられよう。　次に、赤焼き土

器坏・小皿について検討していきたい。SX33から出土した赤焼き土器坏・小皿は内外面ロクロ調整され、底部の切り離し技法は回転糸切り無調整である。色調は浅黄橙色を呈し、小皿の中には赤みを帯びたもの(D－101、D－102)が含まれる。　胎土には粗い砂粒を含んでいる。法量は、坏が口径13.6～14.3cm、底径7.4～7.8cm、器高4.2～4.7cmで、底口比は0.51～0.55の範囲に分布している。小皿は、口径8.4～9.6cm、底径5.4～5.7cm、器高1.65～1.95cmを計り、坏と小皿の間にははっきりとした法量の違いが見出せる。

赤焼き土器については、多賀城跡出土土器群中、内外面ロクロ調整され酸化焔焼成を受けているといった特徴を同じくすることから、須恵系土器の範疇に含まれるものである。須恵系土器は、多賀城跡出土土器群のE群土器及びF群土器に見られる(註3)。このうち須恵系土器に小皿が出現するのはF群土器からである。F群土器に位置付けられるものとしては、多賀城跡大畑地区SE316・317・715井戸跡出土土器群が挙げられる(註4)。この土器群は、F群土器中、第61次調査7層出土土器群より新しく、政庁跡SK78土坑出土土器群より古い様相を呈するもので10世紀後半代の中でも古い段階に比定されている。この土器群中須恵系土器小皿は、口径が9cm前後、器高が2cm以下に集中し、胎土に砂粒を含むものが主体を占めかつ坏と小皿の法量分化が画然としているなどSX33出土赤焼き土器坏・小皿と同様の特徴を示している。よってSX33出土赤焼き土器坏・小皿も10世紀後半代でも古い段階と捉えられよう。

また、今回の調査でも坏類の内外面に油煙状の付着物(D－79、D－84、D－87、D－90、D－93)や内面に炭化した残渣物が付着したもの(D－92、D－98、D－99)、内面に赤褐色をした薄い皮膜状の付着物が見られるもの(D－83、D－91)、灯芯の痕跡の見られるもの(D－80、D－81、D－82、D－85、D－88、D－103)などが存在する。これらの坏類に関しては、灯明皿として使用されたり、何らかの仏教行事に使用されたもの(註5)と考えられる。

(3) 燕沢遺跡の第7次調査から第11次調査について

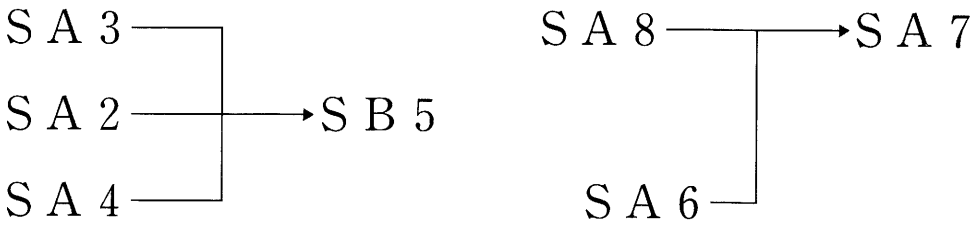
第7次調査以降、燕沢遺跡では遺跡範囲南東部分の丘陵頂上部平坦面において調査を実施してきた(第21図)。その結果、第8次調査で10世紀前半代のものと考えられる南北二面に廂のついたSB 2掘立柱建物跡を検出し、形態から寺院の「僧房」と推定した。その北側ではこの建物と平行するSD 7溝跡を検出し、建物との距離関係や出土遺物から寺院の区画溝と考えられた。第9次調査ではSB 2の南東で9世紀後半から10世紀前半代のものと考えられるSB 3掘立柱建物跡を検出し、またSB 2の南面において小規模なSB 5掘立柱建物跡やそれと重複してSA 2、SA 3、SA 4柱列を検出した。第10次調査ではSB 3の西側でSA 5柱列、南側でSA 6、SA 7、SA 8柱列を検出し寺院の中枢部を区画する塀跡と考えられた。今回の第11次調査は寺院中枢部東辺の区画施設を確認する目的で実施したが、小規模な柱列を2列検出したのみで該当する遺構は発見できなかった(第20図)。

ここで上記の遺構群をまとめたのが以下の表2である。

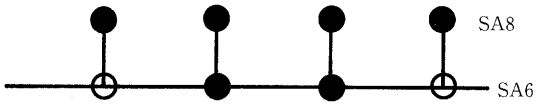
次　数	遺　構　名	規　　模	方　　向
第8次	ＳＢ２掘立柱建物跡	梁行4間(9.6m)、桁行9間(14m)以上（東西棟）	N－4°－W
第9次	ＳＢ３掘立柱建物跡	梁行3間(6.5m)、桁行4間あるいは5間(4.5m)（東西棟）	N－1°－E
第9次	ＳＢ５掘立柱建物跡	梁行2間(3.8m)、桁行2間(4.3m)以上（東西棟）	N－5°－W
第9次	ＳＡ２柱　　列	東西2間(4m)以上	E－1°－N
第9次	ＳＡ３柱　　列	南北4間(5.6m)以上、東西3間(4.5m)以上	N－0°－S
第9次	ＳＡ４柱　　列	東西1間(2.3m)以上	E－9°－N
第10次	ＳＡ５柱　　列	南北5間(16.5m)	N－4.5°－W
第10次	ＳＡ６柱　　列	東西6間(23.6m)以上	E－3°－N
第10次	ＳＡ７柱　　列	東西6間(23.6m)以上	E－3°－N
第10次	ＳＡ８柱　　列	東西3間(10.2m)以上	E－1°－S
第8次	ＳＤ７溝　　跡	総長25.9m以上	E－4°－N

表2　燕沢遺跡第7次調査～第11次調査主要遺構

これらの遺構の中で重複関係が明らかなのは、次の2箇所においてである。



ここでは、ほぼ真東西方向のSA 2、SA 8が、それぞれ真北あるいは真東西方向よりやや西に偏するSB 5、SA 7に切られている。SA 2とSA 6については、掘り方の形状や規模が近似し共に赤焼き土器を含まないことから同時期に存在した可能性がある。また、SA 2とSA 6のほぼ中央にSB 3が配置されていることから、やや方向に違いが見られるが一連の遺構群となるように考えられる。SA 8については、柱痕跡がSA 6、SA 7のように並ばずややがれがあり塀跡と見ることについては検討の余地が残されている。第19図のようにSA 6と同時に存在する可能性も考えられる。第9次調査のSA 2、SA 3は同時に存在することなくSB 5の建てられる以前に時期差のある遺構として存在していたであろう。SB 2とSB 3はいずれも寺院の中枢を構成する主要な建物跡と考えられる。これらの建物跡と塀跡などが9世紀後半代から10世紀前半代にかけて変遷して建っていたのであろう。



第19図　SA6・SA8模式図

(註)

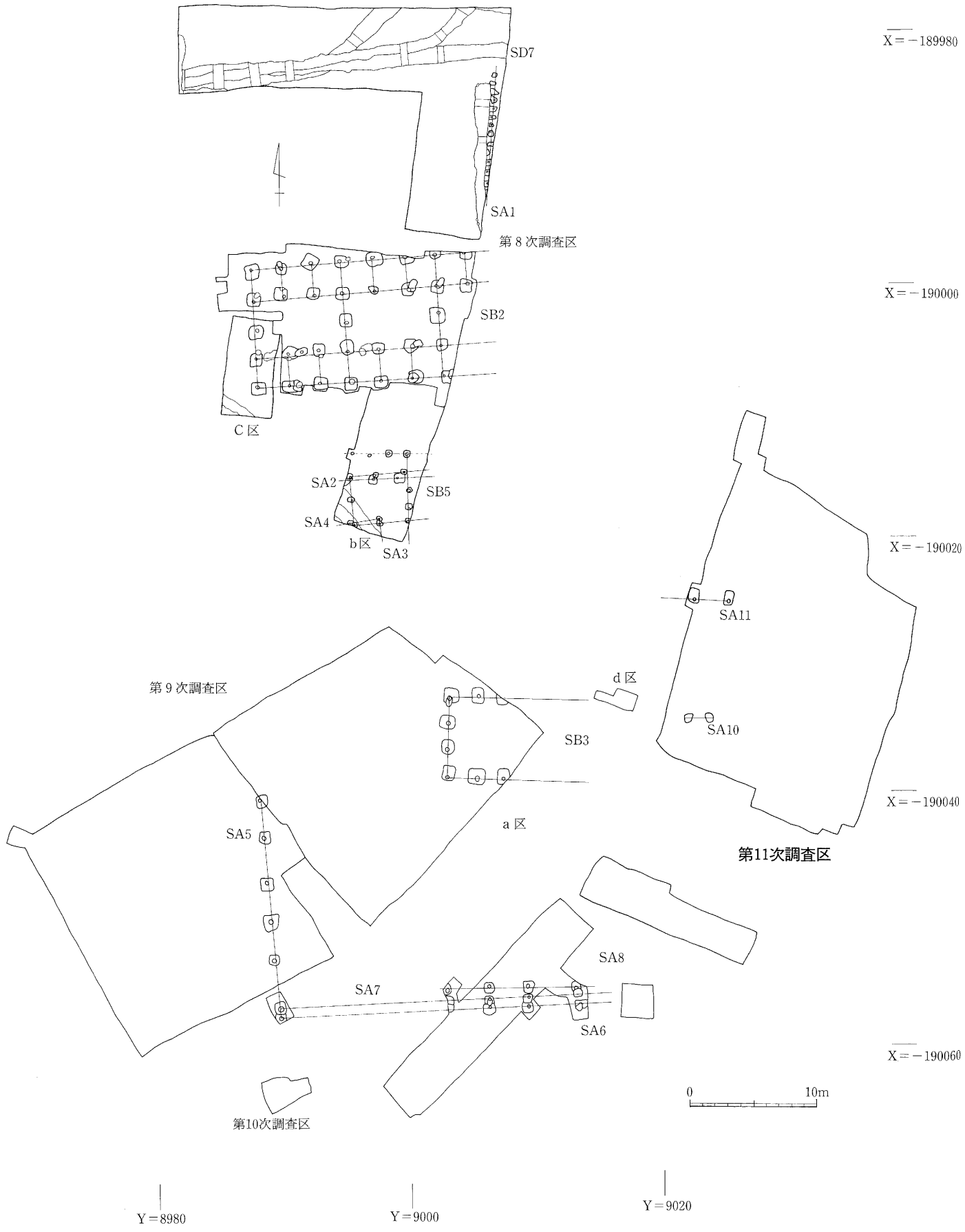
(註1)　氏家和典　「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14号　1957

(註2)　村田晃一　「宮城郡における10世紀前後の土器群」『福島考古』36号　1995
器の勉強会資料　1995

(註3)　白鳥良一　「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ　宮城県多賀城調査研究所　1980
宮城県多賀城調査研究所年報「多賀城跡」Ⅲ　第61次調査　1991
平成3年度に実施した多賀城跡鴻の池地区の調査では、基本層位11層及び10層より出土したE群土器以前のD群土器中にも須恵系土器の耳皿、坏、台付鉢、鉢が少量含まれていることから、いわゆる赤焼き土器については9世紀後半代まで遡る可能性がある。

(註4)　宮城県多賀城跡調査研究所　「多賀城跡」II　第64次調査　1993

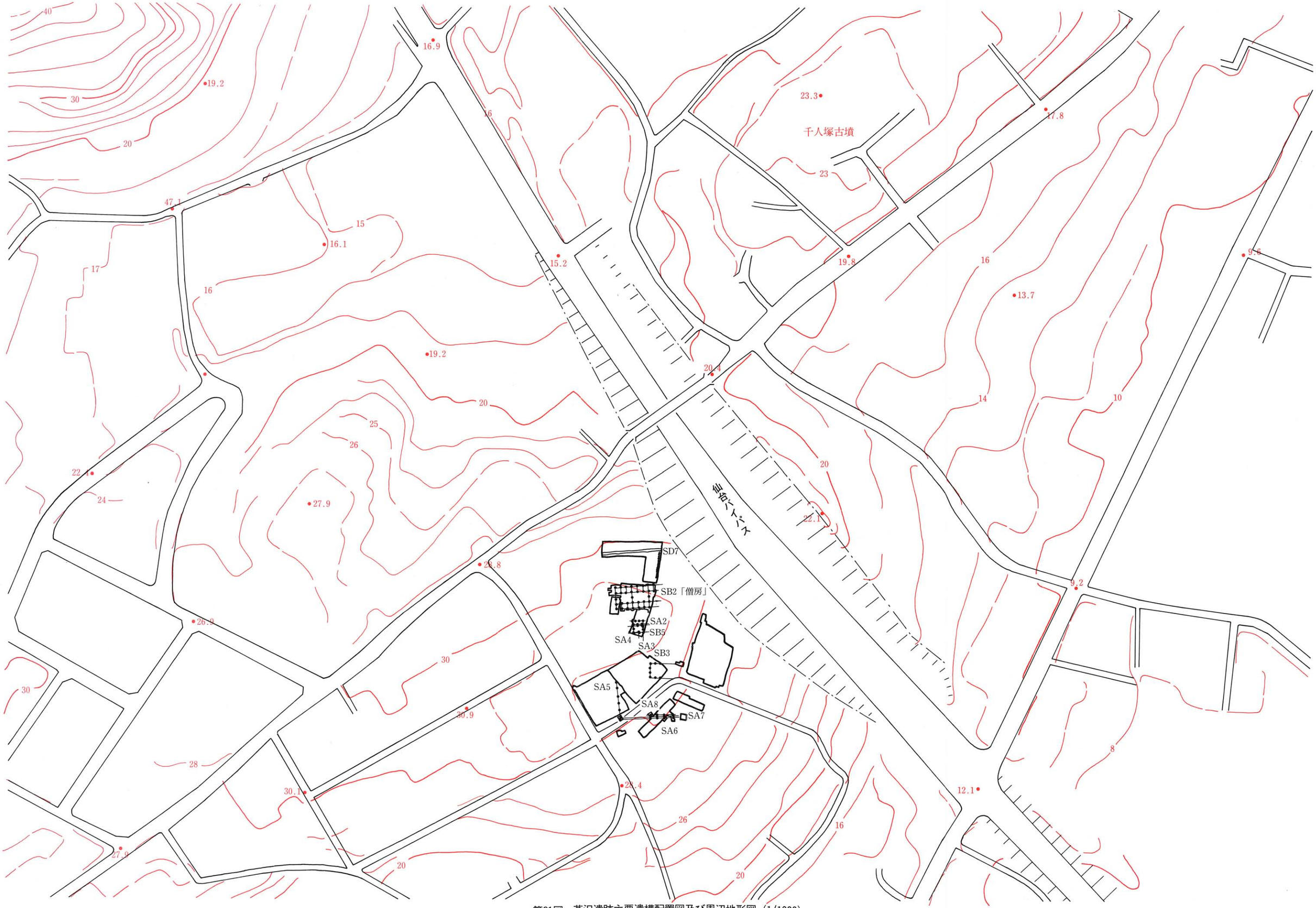
(註5)　仙台市文化財調査報告書第116集　「燕沢遺跡」(第3次)　1988
仙台市文化財調査報告書第195集　「仙台平野の遺跡群　XVI」　1995
仙台市文化財調査報告書第211集　「仙台平野の遺跡群　XV」　1996



第20図　燕沢遺跡遺構配置図（1/400）

千人塚古墳

SD7
SB2「僧房」
SA2
SB5
SA4
SA3
SB3
SA5
SA8
SA7
SA6



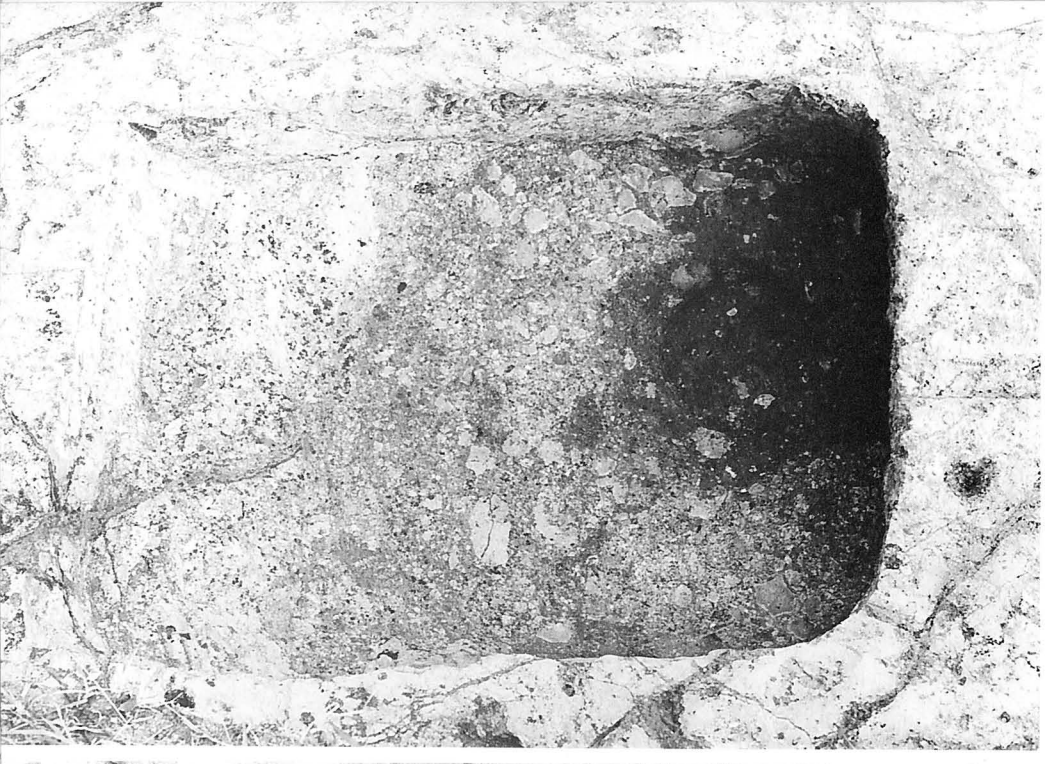
第21図　燕沢遺跡主要遺構配置図及び周辺地形図（1/1000）

写　真　図　版

図版 1　調査区全景（南西より）

図版 2
SA10 柱列全景
（南より）

図版 3
SA11 柱列 E1 柱穴
（南より）



図版 4　SA11 柱列 E2 柱穴（西より）

図版 5　SA11 柱列 E1 柱穴土層断面（北よ

図版 6　SX33 遺物出土状況（北より）

図版 7

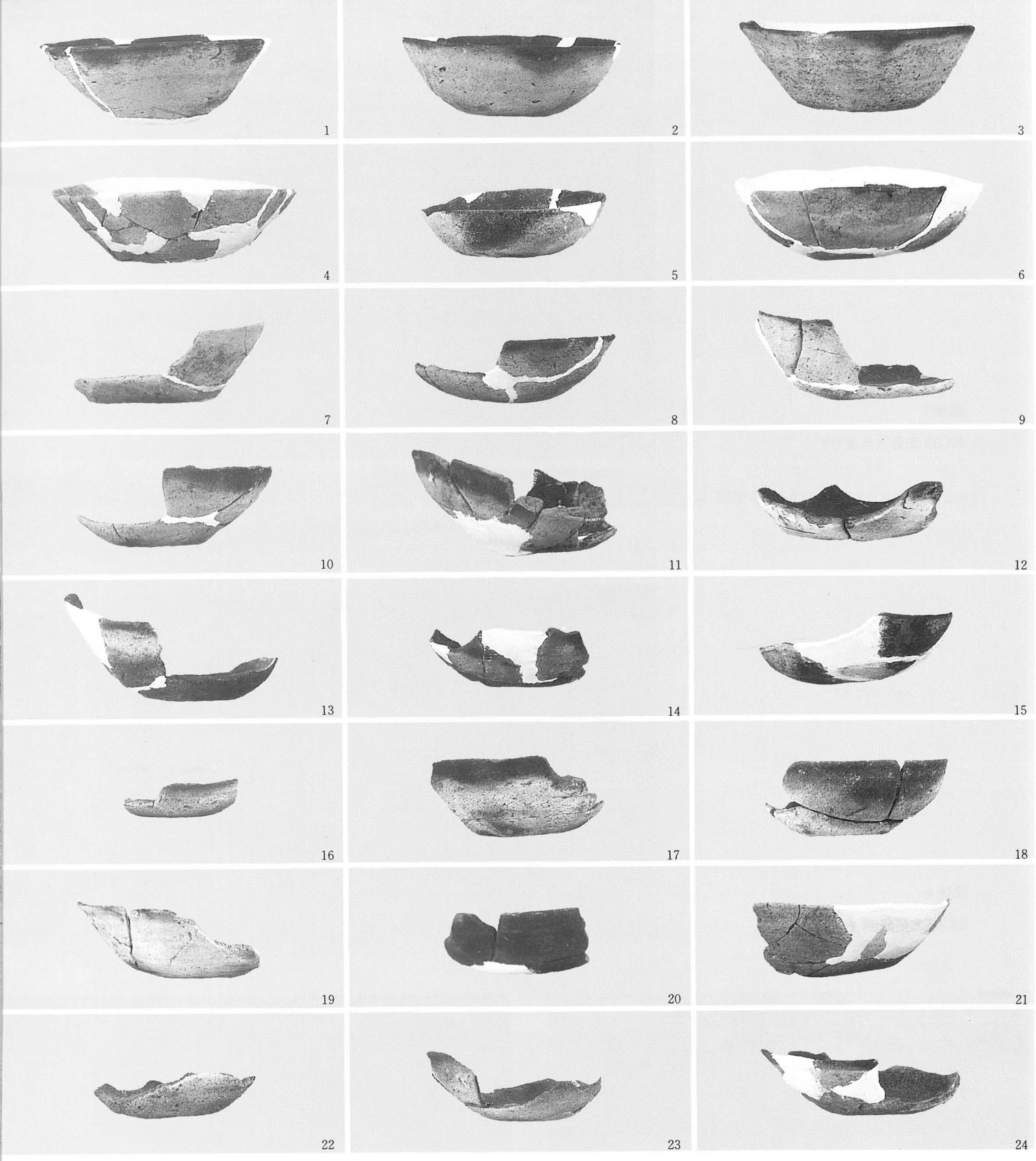
SX33 全景（北より）

図版 8

SX33 土層断面（南より）

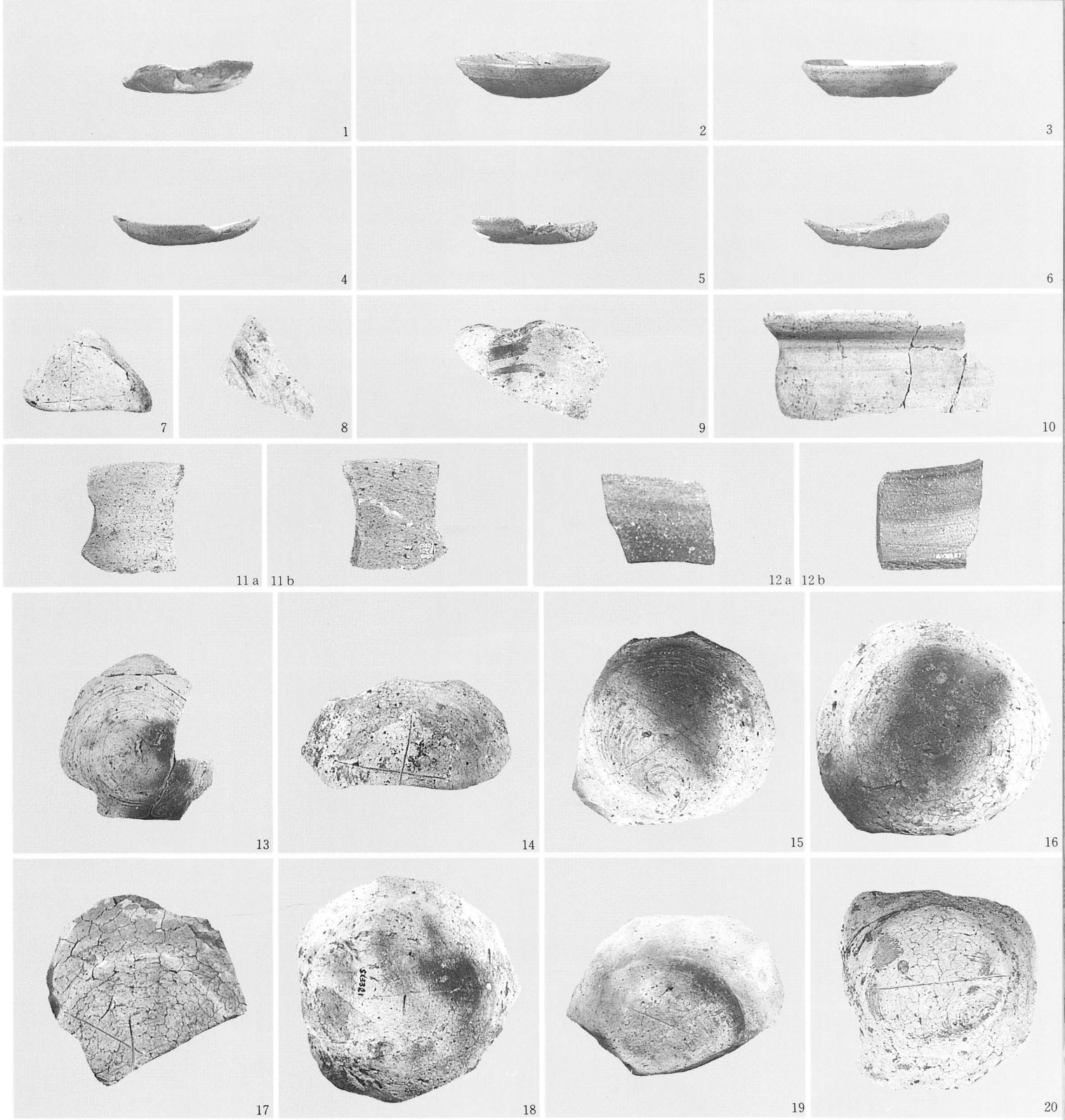
図版 9　SI10・SI11 竪穴住居跡全景（南より）

図版10　SK25 土坑土師器坏（D-117）出土状況（北東より）



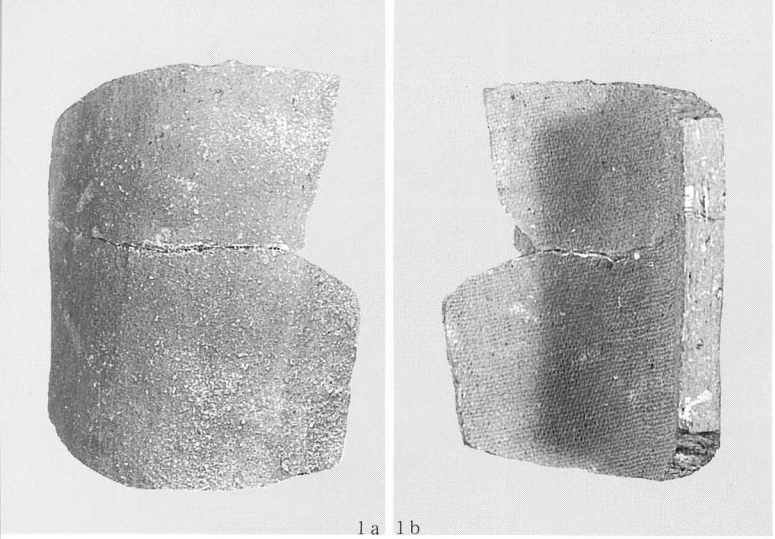
1．D－79　坏　SX33
2．D－80　坏　SX33
3．D－81　坏　SX33
4．D－82　坏　SX33
5．D－83　坏　SX33
6．D－84　坏　SX33
7．D－86　坏　SX33
8．D－87　坏　SX33
9．D－88　坏　SX33
10．D－89　坏　SX33
11．D－90　坏　SX33
12．D－92　坏　SX33
13．D－93　坏　SX33
14．D－94　坏　SX33
15．D－95　坏　SX33
16．D－96　坏　SX33
17．D－97　坏　SX33
18．D－98　坏　SX33
19．D－99　坏　SX33
20．D－100　坏　SX33
21．D－106　坏　SX33
22．D－118　坏　SX33
23．D－126　坏　SX33
24．D－127　坏　SX33

図版11　出土遺物（1）

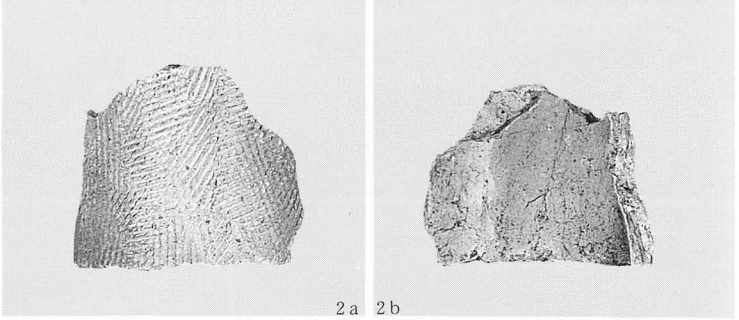


1．D－128　坏　　SX33　　11．D－129　鉢　SX33
2．D－101　小皿　SX33　　12．E－26　壷　SX33
3．D－102　小皿　SX33　　13．D－91　坏　SX33
4．D－103　小皿　SX33　　14．D－108　坏　SX33
5．D－104　小皿　SX33　　15．D－109　坏　SX33
6．D－105　小皿　SX33　　16．D－110　坏　SX33
7．D－116　坏　　SX33　　17．D－112　坏　SX33
8．D－130　坏　　SX33　　18．D－113　坏　SX33
9．D－125　坏　　SX33　　19．D－114　坏　SX33
10．D－107　甕　　SX33　　20．D－115　坏　SX33

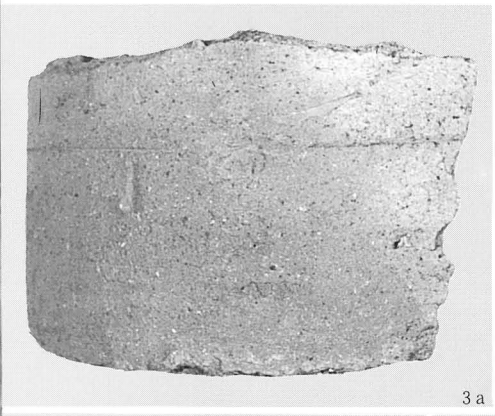
図版12　出土遺物（2）



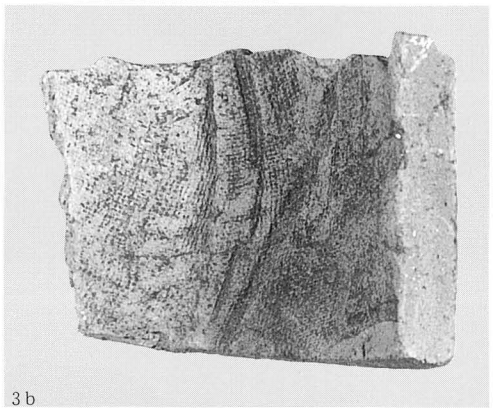
1a 1b



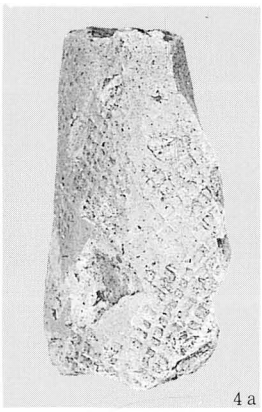
2a 2b



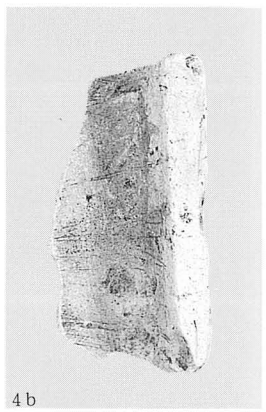
3a



3b

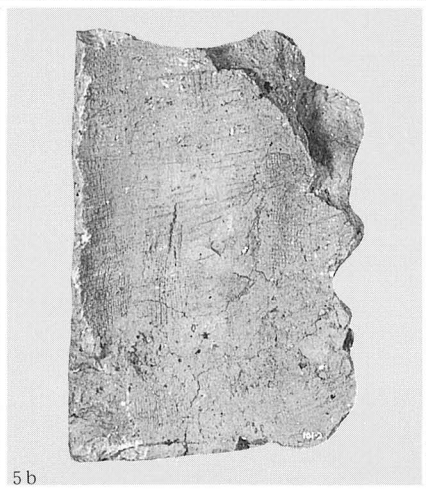


4a

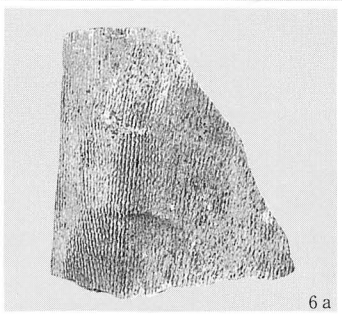


4b

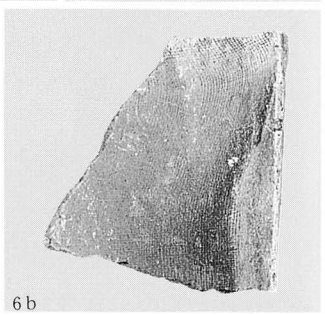
5a



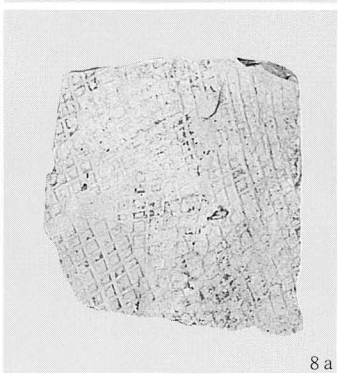
5b



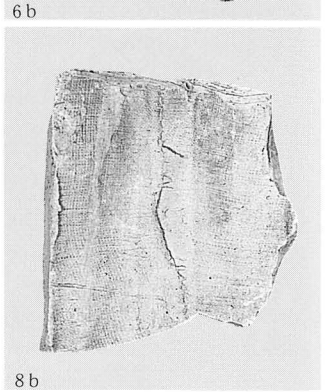
6a



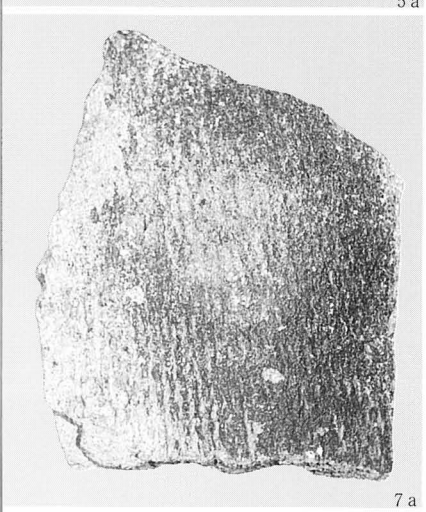
6b



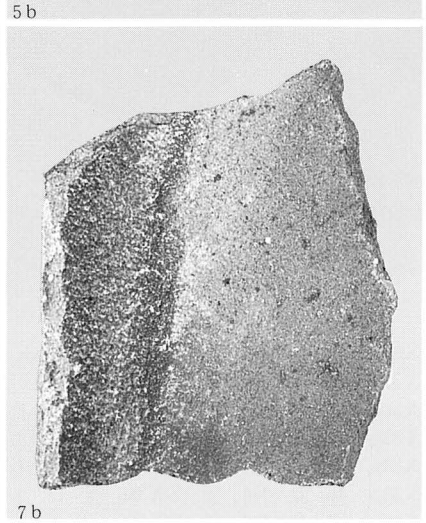
8a



8b



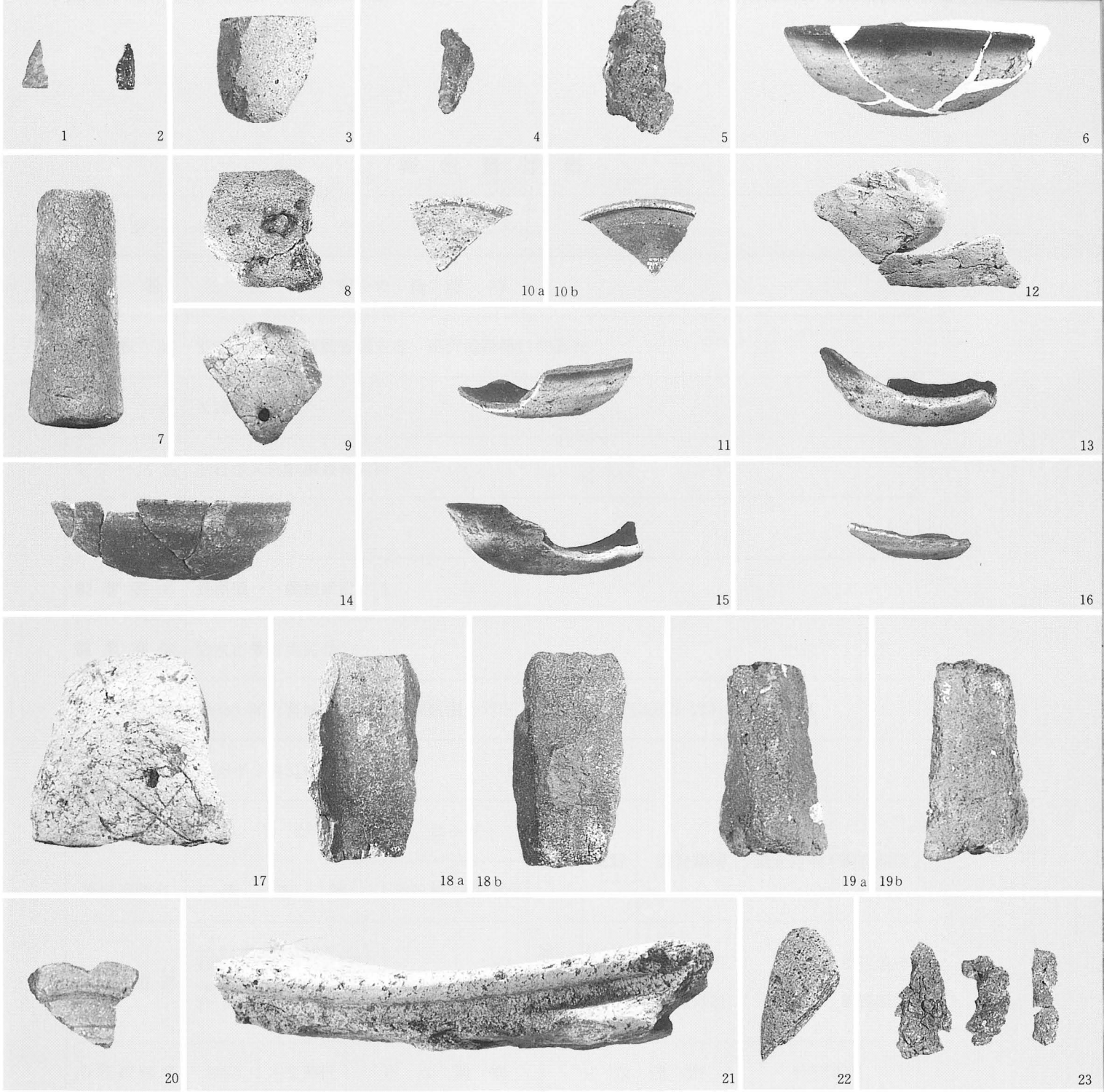
7a



7b

1．F－33　丸瓦　SX33　　5．G－64　平瓦　SX33
2．F－34　丸瓦　SX33　　6．G－65　平瓦　SX33
3．F－35　丸瓦　SX33　　7．G－66　平瓦　SX33
4．F－36　丸瓦　SX33　　8．G－67　平瓦　SX33

図版13　出土遺物（3）



1．K－24　石鏃　SK25
2．K－25　石鏃　SX33
3．K－26　打製石斧　SX33
4．N－11　鉄製品　SX33
5．N－12　鉄滓　SX33
6．D－117　坏　SK25
7．P－4　カマド支脚　SX33
8．P－3　フイゴ羽口　SX33
9．D－124　坏　SX4
10．E－25　蓋　SD35
11．D－119　坏　遺構検出面
12．C－9　甑　遺構検出面
13．D－120　坏　遺構検出面
14．D－121　坏　遺構検出面
15．D－122　坏　遺構検出面
16．D－123　坏　遺構検出面
17．D－111　坏　遺構検出面
18．E－27　風字硯　遺構検出面
19．F－37　不明　遺構検出面
20．F－38　軒丸瓦　遺構検出面
21．G－68　軒平瓦　遺構検出面
22．K－27　磨製石斧　表土
23．N－10　鉄製品　遺構検出面
24．G－69　平瓦　遺構検出面

図版14　出土遺物（4）

報告書抄書

ふりがな	せんだいへいや　　いせきぐん
書名	仙台平野の遺跡群
副書名	平成9年度発掘調査報告書　燕沢遺跡第11次調査
巻次	XVII
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第228集
編著者名	長島榮一、豊村幸宏
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7－1　TEL022-214-8893～8894
発行年月日	1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
つばめきわいせき 燕沢遺跡	みやぎけんせんだいしみやぎのく 宮城県仙台市宮城野区 つばめさわひがし 燕沢東三丁目	04100	01001	38° 17′ 10″	141° 12′ 00″	19971013 ～19971212	400m²	重要遺跡 範囲確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
燕沢遺跡	寺院跡 集落跡	平安	柱列・溝跡・竪穴住居跡 土坑・性格不明遺構	土師器・須恵器 赤焼き土器・縄文土器 瓦・石器・鉄滓	

仙台市文化財調査報告書第228集

仙台平野の遺跡群XVII

－平成９年度発掘調査報告書－

1998年３月

発行　仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目７－１

文化財課 022(214)8893

印刷　株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町24－24

TEL　263-1166